

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

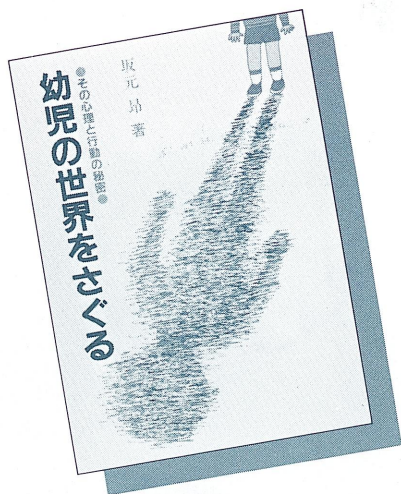
11



第八十四卷 第十一号 日本幼稚園協会

幼児の世界をさぐる

●その心理と行動の秘密●



子どもの世界が
目のまえに広がる、全く新しい
保育の手引書。

東京工業大学教授

坂元 昂・著

NHKテレビで10回にわたり放映され、好評を博した「おかあさんの勉強室」(講師・坂元昂)をさらにやさしく書き直し、一冊の本にまとめました。幼児のものの見方、考え方、話し方、学び方など、豊富なイラストと写真でおもしろく、わかりやすく構成されています。プロの保育者にとっても、保育上の手引となる絶対の良書です。

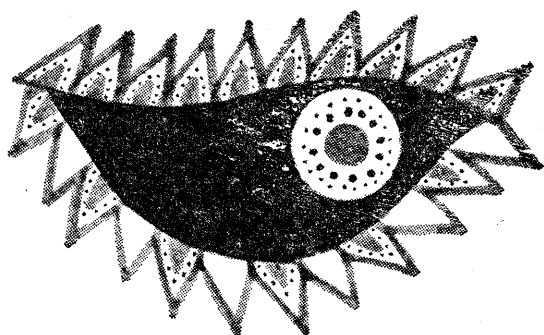
B6判・216頁・定価 1,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼児の教育



第八十四卷 第十一号

幼児の教育 目次

——第八十四卷 第十一号——

© 1985

日本幼稚園協会

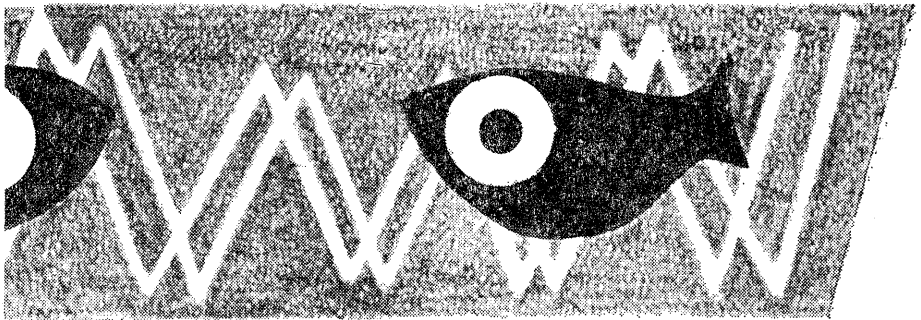
おとなと子どもの間……………関口はつ江(4)

カナダ、アメリカの旅……………津守 真(9)

いろいろなことを教えてくれる子ども……………村石 京子(18)

ある午後の子ども……………向山 陽子(23)

兔園隨筆⑤父親参観日に話したこと……………蕪木 寿江(29)



坂元彦太郎先生を囲んで（第一回）……………（35）

はじめての子ども達……………上坂元絵里（42）

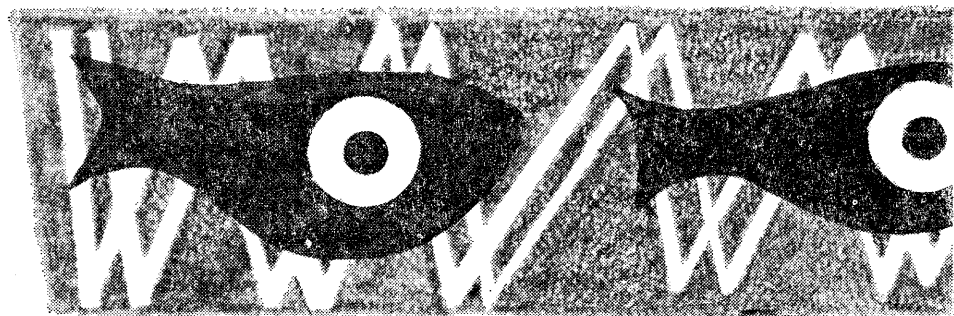
子どもたちのこと……………大橋利恵子（47）

おかあさんがおこった……………矢崎 淳子（50）

若いお母さん達へ……………はるにれの会 橋本 都（56）

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』（岩崎美術社刊）より

カット・福田理恵



おとなと子どもの間

——「まだ子どもだから」を見なおす——

関口 はつ江

最近の学生を見ていると、ことばも行動も小学生の段階でとまってしまっているように思える。事実保育科の学生が幼稚園等で初めて実習した時にきまって発するのは「幼児がこんなにいるいろいろなことを知っていたり、ひとりでできるとは思わなかった。」との驚きのことばである。それだけ自分達におとならしい深い思いや心づかい、行動力がないことの自覚や恥らしいの気持もなく、おとなに頼ることなく自

分達で遊び、また時には相手を鋭く観察して、その内側を洞察する幼児を子どもらしくないと言わんばかりに批評する学生も少なくない。

若い親の子育てに対して「子どもが子どもを育てているようだ。」と評され、成人に達した若者が親の援助なしには生活できにくくなっていく現象が取沙汰されてからかなりの年が経っているのに、その状況は一向に改善される気配はなく、逆に益々強くな

っているように見える。

子どもがおとなに育ちにくい状況は、世界中が変化のあらしに巻き込まれ、さまざまな新しい社会現象が起っていることの一部であり、トフラーが「内面的変化の方が深遠なため、加速的推進力がスピードをあげるにつれて、われわれは今日まで人間と社会を規制してきた範囲内で生活できるかどうかためられることになるだろう。……未来の衝撃と名づけたものに打ちひしがれずに生存し、またそれを避けるためにも、ひとりひとりが無限に今まで以上に適応性をもち……人々はみずからしつかりと地に足をつけようと思えば、まったく新しい方法を探し出さなければならぬ」と述べるような、文化の急速な進歩による社会の激変に内的変化が対応しきれない状態による、個々の責任に帰すことのできない、抗しきれない時代の趨勢であるとしても、否、そうであるからこそ、子どもを育てることが仕事である保育の現場においては、何よりもまず、子どもが内側

から成熟することができるようになることに全力を注がなければならないと思う。

子どもの領分

幼い日に、手際よく料理を作り、一日にして着物を縫い上げる母親に目を見張り、何でもよく知っていて応えてくれる父親に感心して、自分も大きくなったらあのようになれるかとあこがれ、少女時代に娘らしい物やおとなとの同席を願っても、「あなたにはまだ早い。もっと大きくなったらね。」と諭され、子どもの世界におしもどされて、どんなに早く大きくなることを願ったことか。かつては、子ども達は「いくつになったら」「これができるようになったら」「学校を終えたら」……と、子どもではさせてもらえないこと、子どもだからしてもいいことを沢山もっていた。

分別やわきまえがなければ、責任が持てなければ、入れない世界を先に見、身近なおとなを自分と

は違う、と仰ぎ見ながら、おとなになるために、ひたすら子ども時代を熱心に生きることが成熟しようとする力を生み出すものと思われるのだが。

おとならしい在り様を

現代社会は子どももおとなも共に生活を楽しみ、また学習することが期待されている。社会の急速な変化は、おとなが子どもの頃経験しなかった新しいことを次々と提供してくる。かつての経験は子どもに誇れる知識や技術とはならず、おとなも子どもと一緒に物事に挑み、学ばなければならない現状では、子どもはおとなを頼りにできないばかりか、時には子どもを押しつけて、なりふりかまわず目新しい文化を享受したいおとなの姿に失望もするであろう。

しかし、育てる人としてのおとながいなければ、子どもは育つための拠をもてず、おとならしい在り様を知ることができまい。現代の昔話離れもまた、

子どもからおとなというものを知る機会を奪っているようである。物事にかかわる方向と学び方に過去の経験を生かすおとなの知恵や、育とうとする子どもの欲求を満し、他人を見守る暖かい眼差し、強い自制心や周りへの心配りなどを必要としているに違いない。

共に在りたい気持ち

「先生はどうして帽子をかぶって来ないの？」あまり好きでない夏帽子をかぶらされて登園した六月初めの朝、私の顔をしみじみと眺めての四才児の挨拶であった。一緒に幼稚園に通う人に子どもはこんなことを寄せて、同じように思っていてくれることをあらためて感じさせられる。おとなが子どもに心を寄せるよりも、子ども達はもっと直接的に共に在ろうとしていることに気づかされる。それは自分と同じ存在だからではなく、自分とは違うおとなの人であるからこそ――私は幼稚園では園児からはかなり遠

い存在に違いないのだから一であろう。

子どもからおとなに向けた眼ざしを、おとながしっかりと受けとめて応えることによって、子どもは自分がまだ子どもであることや、自分とは異なるおとなの世界であることを親しみをもって感じとり、受け入れることであろう。ローレンツは現代人が人間同志の接触を故意に絶ち、親しみの感情をわずかの人に集中しなければ生きられない状態にあることを指摘しているが、おとなの乱されまいとする心の不安定さもまた子どもの育ちを妨げる一因となつていよう。

自分で育つ

スカートの前を二ヶ所つまんで、その中に小石を五、六個入れ、かかえながら小走りに来た女兒が二人、「これは宝石なの。つるつるでしょ。」と一つを取り出してさわらせてくれる。だまってついて行くど、歩道橋の上で手すりの下を探している。「昨日

置いて行ったのになくなっちゃった。……ここに置いて行こう。」各々が一個ずついいねいに隅に置いて園に向つて走り去る。きれいな石を宝物に見立てて自分の通つた所に置いて行く。次の日それを見つけた時、昨日の自分とそこで出会うのであるか。子どもは自分のしたことを確かめつつ、昨日と違う今日の自分を感じることであろう。小石を宝石にできる輝しい今日、しかし明日はもっと素晴らしい宝物を見つけるかもしれない。何かができなかった自分とできるとなつた自分、心の狭かつた自分と広くなつた自分、自らの育ちを内に感じる事ができるのは、自らの力で変化した時であらうし、自分の成長の自覚の積み重ねこそが、成熟の大切な源の一つであると考えられる。

未熟さの自覚

現在、保育の現場は教育過熱とも言える熱心な指導が行われている。少し誇張するなら、もし子ども

が望むなら、音楽、文学、科学、数学、美術、伝統文化の諸様式から、現代が生み出した機械器具の操作に至るまで、あらゆるものが学べる時代である。

かなり高度なシステムや複雑な技術が幼児にも習得できるような指導法の工夫はよくなされて、「子どもが喜んで」学んでいると言われている。本人達が心身共に未熟な状態にありながら、やりたがるから、やらせたいから、やればできるから、早くからしないと間に合わないから、と特殊な活動が子どもの生活に取り入れられ、手軽に経験させている。しかし、それで子どもを発達させ、教育していると考えるのは大変な錯覚である。子どもの成長への必要感をそいでいるに違いないからである。

プロイラーのように、外側だけおとなの人間を作れることは、経験を次々に並べて、させて行けばできるであろう。しかし、内側から外側まで全部おとなの人間を作るためには、自らの力で世界を広げ、自

己を深める経験を積み上げなければならない。いつか、主体性のない見せかけのおとなが、本物のおとなに支配される社会ができるのでは、と危惧の念を抱くのはうがちすぎた見方であろうか。

良心的な保育者であるならば、保育者の興味や思いつきで、新しい活動を並べ立てるような保育はとてできないと思うのであるが、如何なものだろうか。

(郡山女子大短期大学)

引用・参考文献

- A・トフラー「未来の衝撃」中公文庫
- K・ハインツ・マレ「おとなの発見」みすず書房
- K・ローレンツ「文明化した人間の八つの大罪」思索社
- 津守真「保育の体験と思索」大日本図書

カナダ・アメリカの旅

——保育の理論と実践を求めて——

ミネソタ大学付属ナーリースクール三十年間の移り変り

津 守 真

私の恩師であり、いまは名誉教授のミルドレッド・テンプリン先生が、ミネソタ大学の幼児教育センターに私を案内したいと云われたとき、私は気がすすまぬままに、日時もきめずにいた。それは、一九七一年つまり十四年前に児童研究所付属のナーリースクールを訪問したときの苦い経験があったからである。三十年前に私が大学院学生として、始終実習に出入りして子どもと遊んでいたそのナーリースクールが、一九七一年には知的

教育のプログラムを実施する実務教育の場になっていった。細長く大きな部屋は、いくつものコーナーに仕切られ、テープレコーダーなどを使って、言語や文字、数の認知能力の教育のプログラムが行われていた。かつては遊びを中心とした進歩主義教育の牙城のひとつであったそのナーリースクールが、知的発達の実験室のようであった。案内して下さったH教授は、得意気にいろいろと説明された。進歩主義教育との比較における

私の疑問に対しても、それは哲学であって科学ではないと議論を切られてしまった。それ以来、私は、教育における科学とは何かという疑問を抱きつづけた。

短い滞在の最後の日になって、時間の都合がいたらいつでも電話するようにと云われたテンプリン先生のこゝとばを思い出し、児童研究所を訪ねることにした。テンプリン先生は名誉教授であるが、いまでも児童研究所の中に小さな部屋を持っておられる。直ちに「幼児期の教育と発達センター」（以後略して「幼児教育センター」と記す）の長であるシャーリー・ムーア女史のオフィスに案内された。このセンターは、一九七三年に、幼児教育に関連する大学の諸学部学科の人々及び、幼児に関連する公私諸学校、児童福祉、公衆衛生、特殊教育等の大学外部の人々が集まって、幼児教育に関するブレインストーミングを行ったことから始まったとのことである。このセンターのオフィスは、児童研究所の中に置かれているが、その運営も活動も、大学の諸学部（とくに教育学部と家政学部）及び外部の地域諸施設の人々によって企画

され実施されている。ムーア女史の話をきいているうちに、その考え方は多面的であり、人間的であり、幼児の生活全体が考慮されていることが分ってきた。ミネソタ大学の児童研究所は、一九二五年に創設以来、大学の独立研究所だったが、一九五七年にカレッジ・オブ・エデュケーションの所屬となり、名称も児童発達研究所と改められた。そして、一九七三年以来、幼児教育に関しては、センターとして再び独立機関となったことになる。

幼児の問題は、限られた一面からだけ見たのではなく、人間と生活の全体の中で理解されねばならないことが、この三十年間の歴史の中で、明らかになってきたのだと思う。ムーア女史はこのセンターの企画当初からの長であり、とくにこの六、七年の間にこのセンターは全米に認められるようになってきたと話された。ムーア女史のオフィスの書棚には私に馴染み深い、この三十年間の児童心理学と幼児教育の書物が並んでいて、それが私にも寛いだ気分をよび起してくれたのだろうか。愉快に時を過してから、ナースリースクールに案内された。

以前と同じ細長い部屋だったが、前のようなコーナーはなく、つみきなどで遊んだあとが散らかっており、数人の子どもが室内にいた。ドアをあけて裏庭に出たところ、子どもたちがあちこちに散らばって、地面を掘ったり、水を流している姿を見て驚いた。子どもがそれぞれに戸外で遊んでいる。私は予想していなかった光景であった。子ども達の背の高さに台を作り、水をためて、泥や木の葉をいれて遊ぶようにしたところもある。私は嬉しくなると、水の中に手をいれて遊んでいる子どもたちと、私も子ども達の傍で水に入れたりしていると、じきにひとりの子どもが親しげに私を見て、木の葉をくれるという。私が手を差し出すと、木製の大きなスプーンに水をすくってくれた。私はそのスプーンを受けとり、やりとりしているうちに、隣にきた男の子にそのスプーンを渡してしまった。気が付くと、最初の子どもが泣いている。もうひとりの男の子は、私がそのスプーンをくれたのだと云い張る。それは、さきほどの子どもが自分

のものとして使っていたスプーンであった。私はいそいで別のスプーンを見付けて渡したがだめだった。これもいつものように、私は困って、二人の間にはさまって、あやまったり、いろいろと言ったりしていたのだが、泣きやまない。戸口でムーア女史と園長のゲリー先生とが待っているのが分るのだが、立ち去るわけにいかず、一瞬のことではあるが、訪問者から保育者となって奮闘した。ちょうどそこに男性の保育者がきて子どもを抱き上げた。私はその場の経緯を説明し、皆のところにいそいだ。その男性の先生は、そのクラスの担任の先生であった。

そこから部屋を抜けて、更に裏庭に案内された。以前に私が実習していたころよりも、庭はひろげられ、芝生が植えられ、木で作った遊具がいくつか植えられていた。また一隅には屋根で囲った場所があり、砂場になっていた。北国の冬は長いので、周囲を蔽われた砂場で寒い時子どもたちは遊ぶことができるのだらうと思っただ。アメリカの幼稚園は、しばしば、園庭は金網で仕切

られた無愛想なところが多いが、このナースリースタールの庭が園庭らしくつくつかえられてあるのも驚きであった。多勢の子どもたちが、ひとり、二人、数人ずつ元気に遊んでいた。庭の真中の木の株に、小児科のインターの医学生が腰をおろして観察していた。これは幼児教育センターのプログラムの一環とのことであった。また、実習生らしい学生が何人もまじっており、迎えにきたらしい親たちも、何人か園庭の中にはいつていた。この園庭で子どもたちや大人たちが、活気をもって活動している姿は、三十年以前には見られなかったことのように思う。そのころは、このナースリースクールでは、室内で子どもは自由に遊んでいたが、戸外の遊びは貧弱だった。しかし、この日の園庭の子どもの様子は、お茶の水の付属幼稚園や、現在の私の愛育養護学校の子どもたちを見るとときと変らなかった。大人が自由に出入りして子どもたちと交わり、また子どもから学ぼうとしている点では、それ以上にすら思えた。

帰り際に、ひとりの小さな子どもが、私の手にふれて

いるのに気付いた。ふりかえると、その子は横たえてある丸太の上を渡ろうとして、私の体につかまったのであった。じぎにその子は手を離して、ひとりで丸太の上を恐るおそる歩き始めた。私もだまって見ていると、遂にその子は端まで歩いていってとびおり、私の顔をみてにっこり笑った。向う側に母親がいて、その子が渡り終えるのを見守っており、私と目が合って、母親もにっこり笑った。

ナースリースクールの園長は、リン・ゲール女史で、元気のよい中年の温和な人であった。三十年間のこのナースリースクールの変遷について私が感想を話すと、その通りであると云って、それから話が弾んだ。このナースリースクールは、幼児教育センターと密切な関連をもつて運営されるようになって以来、子どもの遊びを主とするようになったのだという。園長であるゲール女史も、センター長であるムーア女史も、担任の先生も、いずれも、勤務時間の五〇パーセントはナースリースクールで過し、他の五〇パーセントは大学の授業のために使うよ

うな規則になっているとのことであった。そのことは後になって見たナースリースクールのハンドブックにも明記されてあった。

私共の話は、直ちにメインストリームに及んだ。それは、十年前前に、障害児もナースリースクール・幼稚園・学校で教育を受ける権利を有するという州の法律が通過したことからはじまる。このナースリースクールにも、昨年は二人の障害児がいたという。今年は軽度の子どもだとのことであった。ゲール女史は、どこでも障害児を受け入れることになったのだが、その場合の保育の質が問題なのだとも強調された。つまり、このナースリースクールのように、それぞれの子どもが遊べるように、子どもに合わせた生活が作られていけばよいが、そうでなければ、障害児は普通児の集団の中で悩みを大きくする場合もある。また、とくに情緒障害、自閉症の場合には、普通児と一緒に保育することに困難がある。子どもによっては、園の外に出ていきたがることがないかと質問すると、そういう場合には実習生がついていく

のだが、そういう実習生の存在は、実に貴重なものであるという答えであった。そういう役をとる人、と場がなければ、障害児を含めてやってゆくのは困難な場合もある。

私は、障害児教育の問題は、障害をどのように治すか、欠落した能力をいかに訓練によって向上させるかということではなくて、障害という宿命を負っている子どもを保育することが課題なのだという私の考えを話すと、同意を示された。私はアメリカにも同じ考えの人々がいることを心強く思った。

しかし、これはアメリカでは決して一般的な考え方とはいえない。この前日に、私共はこの滞在中泊めて頂いている友人のN氏夫妻に伴われて、カレッジ・センターという肢体不自由児の社会復帰を目的とする学校にいった。郊外のひろびろとしたところにある設備の整った立派な学校であった。成人のための部門があり、肢体不自由の人のためのセクレタリー養成機関、アマチュア無線の資格取得のための訓練室などあって、身体障害者が、

障害を補い克服して社会に参加できるように、カレッジ（勇氣）を与えることを標榜した学校である。一年間を目標として、自覚して努力する者にとってこれは意義があると思う。しかし、幼児にはこの考え方はあてはまらない。この学校には幼児部門が付設されていて、観察窓から見学した。そこで何が行われているかは、プログラム表を見れば分ると説明された。それには月曜から金曜まで、十五分刻みぐらいに、プログラムがぎっしりと記載されていた。集まっている子どもたちの身体障害の程度は、それほど重度と見えない者も多く、見学している、私共にはこの型にはまった教育がもどかしく思えた。障害を何とかするという以前に、そのまま子どもが存在そのものを受けとめる子どもの生活全体への配慮が必要であろう。ミネソタ大学付属ナースリースクールとは、この点で対照的であった。

メインストリーム、すなわち大河主義の運動には、障害児を迎えいれるというだけではなく、すべて異質な者を加えてひとつの社会を形成するという考えがある。移

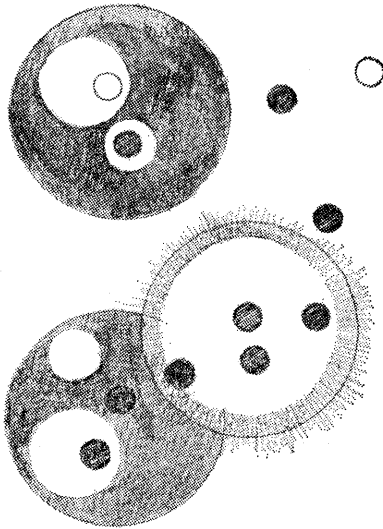
民の子ども、難民の子ども、異人種の子どもを、それぞれが快く迎え、異質な人のもつ文化を尊重して、共同の社会を形成するようになることは、いま、西欧の学校で最大の教育課題である。障害児もその一環にはかならない。このナースリースクールの入園資格には、人種、信条、皮膚の色、性、国籍を問わず、だれにでも楽しい権利をもって、一般に開かれていると記されており、更に、欠員を生じたときには、子どものきょうだいや第一の優先順位、次にマイノリティ、すなわち、移民や障害児と明記されている。

ナースリースクールから帰るとき、廊下の両側の壁に、子どもがマチックでかいた線の落書きがたくさんあることに気が付いた。その一部分にはパネルが貼られて落書きの壁がかくしてあったが、廊下に落書きのある園を見るのは珍らしいことである。このことから、このナースリースクールの保育の毎日の様子が察せられる。

この三十二年間に、私は三回、同じナースリースクールを訪ねたことになる。第一回は一九五三年、第二回は

一九七一年、第三回は今回で一九八五年である。その移り変りを考えてみると、第一回ときは、自由な遊びを主としながら、中心となる主題を作ろうとする進歩主義的教育の残照とも云える時代であった。第二回ときは、知的教育の心理学的プログラムを実施することが科学的教育と考えられた時代であった。そして今回は、すべての子どもに分け隔てなく、遊びそのものを重視している点で、前どの時期にもまして、子どもの生活そのものに目をとめているように思えた。このことは目下進行中の現代に属することだから、これからどの方向に向っていくのか確言はできないが、私は、アメリカの社会、大学、教育界の自己修復力の早さに驚いている。また、この間に幼稚園の教育の内容には変化が見られても、数人を単位とする小さな集団と先生との個人的接触が核となっていて、決して画一的授業形式にもどることはなかったことも注目すべきことである。これは個人主義の文化によることもあるが、今世紀のはじめに確立された進歩主義教育の力も大きいと私は考える。ただ、

今回訪問したのは、二才から五才までのナースリースクールであって、アメリカでは、小学校に入る前の一年間がキンダーガルテンである。小学校低学年も日本のような画一集団教育ではないから、大体推察はつくのだが、現状を見る暇なしに、その日の午後の飛行機でロスに向った。



この日のことをあれこれ考えながら飛行機の中で見たこのナースリースクールのハンドブックには、次のようなことが記されていた。

「このナースリースクールは、2才から5才までの約百人の子どもに、発達の方向づけられた教育経験を与えるところです。カリキュラムは、発見、指導された模索、及び遊びを基礎としています。すべてのクラスルームでは、いろいろの場面や活動が中断されずに継続して行われるようになっており、どの子どもも自分自身の速度で発達することが許されます。また、個人的感情生活の技能や価値、知識や知的能力、グループの生活の価値観や人間関係を、自分自身のやり方で学ぶことが許されます。

『理解すること』『一緒にやってゆくこと』『協力すること』などの概念は、一日の特定の時間割の中で教えられるのではなく、子ども自身によって経験されます。それは調理や外出のための仕度のような活動に子どもが参加することにより、大人から学んでゆきます。子どもが経

験するであろうことに関心を向けるだけでなく、子どもが参加するときに生じるさまざまなことにも関心を向けます。子どもは、人々を好きになることを学び、また、自分にもできるという自信を経験せねばなりません。

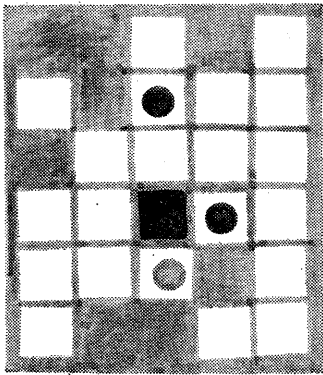
先生たちは、子どもたちの要求や興味にこたえるような活動を計画します。したがって、それぞれの先生のやり方と、子どもたちの要求と興味によって、それぞれのクラスルームでは違ったことをしています。先生の役割は、子どもがその技能、知識、経験を組織づけ、明確にし、ひろげるのを助けることです。学校はアンフォーマールにみえますが、そのプログラムと環境は、個人とグループの目標にかなうように注意深く計画し構造化した結果生れたものです。

遊びと動きの経験は、学習が行われる最も重要な二つの場です。幼児は、具体的に手でさわることできる物であそびます。そして抽象的現象を操作するよりも、直接に物をいじることにより大きな価値を認めます。したがって、子どもたちが積極的に没頭することができるよ

うな活動を注意深く計画することが、プログラムの最も重要なことです。……」

十四年前にこのナースリースクールを訪問したときに抱いた疑問、教育における科学とは何かという問題に対して、最も適切に答えてくれているのは、カナダの学会でも出会った西ドイツの学者、ヘルムート・ダナーの著書、「精神科学としての教育学の方法」である。教育学の方法は、自然科学における客観的実証主義とは異なる。人間にかかわる精神科学の方法は「理解」である。科学には自然科学と精神科学があるのであって、教育学はこの後者に属する。このことについては今後も考えつづけてゆきたい。

(愛育養護学校)



いろいろなことを教えてくれる子どもたち (9)

村石京子

● 空を見ているてるてる坊主

今年の梅雨は随分よく雨が降りました。園外保育などを予定していても、雨のため延期になることが再三で、いつも天候が気がかりだったものです。

子どもたちも同じ思いだったのでしょうか。遠足の前日に、誰かがつくり出したのがきっかけとなって、我も我もとてるてる坊主つくりにいそがしい日もありません。保育室の窓辺近くには、てるてる坊主がずらりと並

んでつる下がっています。

おとなの感覚だとてるてる坊主は白い紙で簡単につくられるのですが、今日のそれは子どもたちの思いをこめられて、目鼻は勿論のこと、リボンをつけてもらったり、色紙で夫々によく似合う着物を着せてもらったりして飾られています。I夫はものをつくるのが好きな子どもですが、「僕はお父さんのてるてる坊主をつくりたい。」と言って、随分と大きなものをつくり、それが窓辺でゆら／＼風にゆれていると、友だちは「わあ、ジャ

ンボだ。」などと批評しあったりしています。K子も「私も大きいのがつくりたい」と言っていたのに、出来上がったのははた目にはあまり大型とも見えませんでした。割合と満足な様子なのは、自分の中にあるイメージと重なったからなのでしょうか。

帰りしなに、明日お天気になるように頼みましょうという事になって、てるてる坊主のうたなどうたつていたときのことです。S男が急に「K子ちゃんのとてるてる坊主、本当にお空を一生懸命見ているみたい。」と言うので、みんな「あ、本当。」「明日お天気に来るかなって考えてるんだね。」などと話しあっていました。普段は結構いろいろ心得てもう何でも知っているよといったげなところのある子どもたちの会話だから面白いのです。

いつもは元気一ぱいで強い男の子の様子のできるS男ですが、どうも毎日の雨続きには明日の遠足の空模様を心配でしようがなかったでしょう。自分の気がかりな思いを、てるてる坊主もくんでくれて、一生けんめいお空を

見てると思ったのでしょうか。思わず言ったS男の言葉は、時を得てみな共感を呼びました。

いつもは仲々の気強い男の子と見える子どもも、違う場面では心の中のまだ子ども子どもしている一面を見せたりして、ほほえましいものです。またそれはある角度から考えれば、その子どものもつ繊細さ、優しさとも見ること出来ます。私たち教師は、子どもを固定的な目で見ることをしないように心がけ、いつも子どもの多面性に目をむけるようにし、子どものもついろいろな面に気づくことをしなければならぬと思います。それについても、子どもの中は純であり、可愛いものなのですね。

● 自然とふれあう子どもたち

梅雨の晴れ間のある日、子どもたちは喜々として庭へ飛び出して行きます。山の雑草園でも、楽しそうに草つきをして遊んでいます。生い茂った雑草も、子どもたちの手にかかれば、それはスパゲッティになったり、焼き

そばになったり、そしてお米になってお米屋さんの店先にも一ぱいのせられています。そんな遊び方をしている子どもたちと一緒にいて、雑草もどんと自分たちの遊びの材料に変身させていくその創造力には、いつもながら全く感心してしまいます。

そして大きくなった雑草は、抜いて遊びの材料にふんだんに使っている一方で、芽生えたばかりの小さな草や花は、大事に育てたいという気持もあって、そういう場所はおまさないように、そうっと「指先歩き」で軽く歩くのだそうです。つま先でそうっと歩くことなのですね。小さな花や草の生命を大事にしたいという、そんな優しいさもかいま見せてくれる子どもたちなのです。

そして暫く山で遊んでいて、下の園庭に下りてくると、あら、さっきまで一緒に山で遊んでいたS子は、何だかいそがしそうに砂場のふちで、滴んで来た草をバケツに入れて熱心に洗っているところでした。砂場には水が一面に張ってあります。さて何がはじまるのかな、草はごちそうかしら、まぜ御飯の材料なのかしらなどと思

いながらも、部屋の中の子どもに呼ばれて、S子の遊びの行方は見届けられないまま、部屋に入りました。

暫くして「ね、ね、先生、見て、田植えしたのよ、見て。」というS子の呼びかけに砂場へ行って見ると、いつも子どもたちにお米と呼ばれている雑草が、三、四本ずつ束ねられて、水面の砂場の中に形よくちょん、ちょんと並んで立っています。それは本当に小さな水田さながらの風景でした。

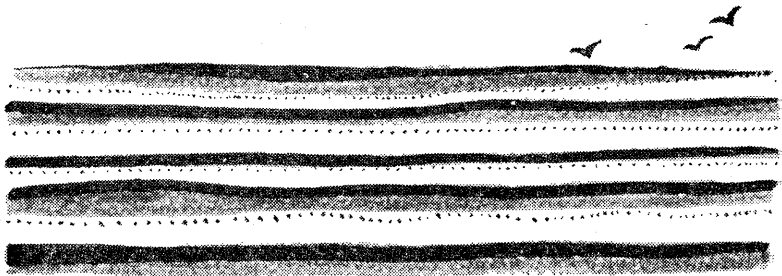
思いがけない砂場の様子にびっくりして、「あら、Sちゃん上手ね、どうしてそんなに上手なの。本当のお百姓さんみたいね。」と言うと、さも嬉しそうににこにこして、「だってご本で見えて知ってるのよ。田植えないと、お米がとれないでしょ。いちごも、赤かぶも、トマトもおなすも幼稚園で植えたけど、お米はまだ植えてないの、私がやっておいたの。」と言います。

本当にこの子は植物に関心が強く、いちごが赤く熟れてくるといつも私に知らせてくれ、なすの花が落ちて小さな紫の実を結ぶと、いとおしそうに日々の成長を観察

している子どもなのです。S子はなすやトマトと同じように、この砂場の田植えでお米は育つと思っているのでしょうか。もしそうだとしたら、何と言えはよいのだろうと、私は一瞬思いめぐらしてしまったものです。でもその心配は、杞憂でした。充分遊んで、そして遊びが認められたことに満足したS子は、片づけの時間になると、自分でさっきの田植えの苗をきれいにさっさと片づけていきました。

「どうするの？」と聞くと、「おうちへ持って帰ってA子ちゃんとお米屋さんごっこするの。」と言って、ビニール袋にしまって持って帰る用意をしていました。きつと今日この子の家では、あの草は妹のA子ちゃんに「私が植えたお米なのよ。」などとお姉さんらしい説明とともに、ままごとの材料に使われたことでしょうか。私は何だかホッとしたり、思いがけない遊びを都会の子どもの中に見て、びっくりした日でした。

それにしても子どもは、まわりの環境からいろいろなものを感じとったり、学習したりしているのですね。そ



して遊びながら、いろいろ考えたり、実験して見ようと思いたったりして、確実に成長しているのだということを知りました。そして五才児ではすでに、遊びの「ごっこ」と、現実を識別していく力も育っているのだという一面もわかったのです。

そしてまた、ある土曜の午後のことです。幼稚園の卒業生の小学校三年生になった子どもたちが、幼稚園で級会を開きました。久しぶりに一堂に会して、大人も子どもも話はずみませんでした。中でもお母様たちは、いつまでも近況報告で積る話がつきません。やがて子どもたちの方は、勝手知ったる以前の我が家とばかり、思い思い外に飛び出して遊びはじめました。

そして時折顔を見せると、真赤で汗びっしょり、本当に久しぶりに幼稚園で遊べて、もう夢中という感じでした。やがて予定されていた時間があっという間に経ち、会場に戻って来た女の子たちがそうと来て、「先生、目つぶっていてね。」と言って後にまわり、頭につけてくれたのはクローバーの白い花で編んだきれいな冠でした。

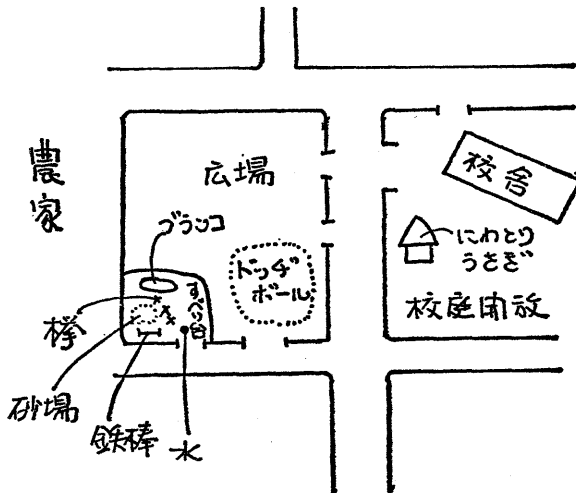
「ありがとう」「わあ、先生すてきよ。」などというやりとりの後、会はやがて閉会となりました。

皆が名残りおしげに帰ったあとで、白い花の冠を手にしたがら思いました。なつかしい幼稚園に来て、山で遊んだ子どもたちは何年前か前のことを思い出したのでしょうか。幼稚園児であった頃、山で遊んだ毎日の中に、草つきをしたことも思い出したのでしょう。その中には、私がつくってあげたクローバーの冠のこともあったのでしょうか。誰が言い出したのか、何人かで一緒に編んだ太い美しい冠は、私が以前に子どもたちにつくってあげたものよりずっと立派でした。子どもたちは、こうやって時が経てば、きっと今度は私も教師に対して、そして勿論両親に対して、社会に対して、以前自分がしてもらった以上のものを、有形無形で返してくれる日があるのだということを思ったものでした。

(お茶の水女子大附属幼稚園)

「ある午後の子ども達」

樺が少しずつ色づきはじめたある秋の日の午後、娘と公園へ行き
 ました。家から一才一〇ヶ月の子どもの足で十分のこの小さい公園
 は、水も充分に使え、大きな樺が三本あり、春は芽ぶき、夏は木陰
 を、秋は落葉を、冬は空にむかって伸びる凜とした姿を見せてくれ
 周囲も農家や、その土地で、木々が多く、四季をそれぞれに美しく、
 特に、真夏の炎天下でも、樺と水のお陰で、我子達は毎日三時間位、
 泥ンコになって遊べる公園です。木はあっても、子ども達の遊ぶ砂
 場や、すべり台、ブランコが木陰になる公園は、それに加えて水が
 使える公園というのには他にはなく、有難く思います。と同時に、公
 園を造る際、木、一本を植えるのももっとも実際の子ども達の遊びを研
 究して、植えて欲しいと願わずにはいられません。



向山陽子

さて、前置きが長くなりましたが、午後の公園には小學生達が遊びにきます。図のように、広場や、校庭もあるのに、不思議とこの小さな公園がよいようです。それにしても、遊んでいる子は少く、ブランコに五人、すべり台に二人のグループが二組。

この秋の好日の放課後、広場や校庭はガランとして、隅の公園にわずか九人しか遊んでいないなんて、子ども達はどこへ消えたのか、ちょっととしたミステリーではありませんか？

ブランコでは、小学一年生位の男児五名が陣とりと、大きく揺らす競争を組みあわせたような遊びで、おもしろそう。次々と遊びが変化発展していき、大声をかけあって夢中で遊んでいます。

すべり台では、小学四―五年生位でしょうか。女子の二人組がすべり台の上で、男子の二人組が下で、手さげ袋（塾の鞆でしようか）を地面において、それぞれにアイスクリームをなめながら、ちまちま、ヒソヒソと、何やら話しています。

そこへ、二十数名の学童保育の子ども達が隣の広場で男女学年混じったのドッジボールをはじめました。体の大きな上級生らしい男子がリーダーぶりを発揮して、小さい子や、弱い子が線を踏んだりするのは見て見ぬふりをし、力のある子やファイト満々の子には対等に臨み、なかなか活気のある好ゲームとなりました。皆、楽しそうで、見てもさわやかです。

娘はドッジボールの勢いにのまれたのか、遊び出さず、私の膝の上のぼってきて、母子での観戦となりました。

私は思いました。

地域での子ども集団、子どもの遊びが少なくなっていることは、考えていたよりもずっと深刻。この小学校の先生が、「この学校の子達は放課後もよく遊んでいます。」とおっしゃっていたが、学童保育の子ども達以外で遊んでいる子は僅かではないか。

学校でも、朝や、長い休み時間には「今日は外遊びで

す。全員、窓をあけて外に出しましょう。」などと放送が入るのでびっくりします。

遊び場所まで決められているのです。外に出たくない子もいるだろうに。二十数年も昔、机の棧に足をかけ、両足の間から相手にボールを投げ渡す「天下おとし」は、校庭でのそれよりも数倍も楽しかったのに。校庭での皆の遊びを見おろしながら、明るい窓辺で、リリアンを編んだり、トランプで遊んだのも良い思い出なのに。そう、二三日前、校舎の裏で遊んでいた子は他の子に注意されて移動していました。人気の少ない裏庭は、魅力なのに。

さっきの先生が、「休み時間にはできるだけ校庭で、子どもに任せて遊ばせています。」ともおっしゃっていたが、本当にこの言葉どおりで、子ども達は時間はもちろんのこと、空間も決められて、遊ばされているので、子どもに任せられていたのは、許された時間と空間と遊具で何をして遊ぶかという事位でしょう。遊びの内容にもきつときまりがあるのでしょう。走り回ったり、ボー

ルを相手に投げる遊びは校庭では見られません。「健康と安全」という先生方の意図もわからないではありません。でも、これでは、本来もっと自由であるべき遊びからは程遠く、子ども達が放課後や、休日の校庭開放を利用しない気持ちがあわかってきます。学校には「健康と安全」という名の「管理」のにおいがして、子ども達にとって本当に遊ぶ場所には価値しないのではないのでしょうか。校庭開放を利用するのは、母親と乳幼児、監督さんに率いられた、サッカーや野球のチーム位です。まさに「健康と安全」の人達で苦笑せずにはおれません。

私はさらに思いました。誰かがどこかで、「働く母親や、保育園での子ども達は集団の中で力を貯え、育ちあうが、地域の母親と子ども達には育ちあう場が少く、力不足である。」と書いていました。

学校での遊びの現状、公園での地域の子ども達の遊びの貧困を見る限りでは、本当にそのとおりです。一児の母親である私は、学童保育の子らのドッジボールの楽しさを見て、「地域での現状がこうならば、娘は学童保育

に入れて、私も働きに出た方が集団の中で育ちあい力がつくのではないかしら。」と考えはじめていました。

と、そんな時です。

学校から、笛を手にした女性が小走りにやってきました。学童保育の先生でしょう。

「ピーッ」と笛が鳴り「反則！」とその先生は叫びました。ボールをとった女の子が線を踏んだのです。例のリーダー君はムツとした顔でその先生を見ました。

しばらくして「ピーッ」あたったボールはバウンドボールだと思い、とって投げようとした子を指さして、その先生は大きな声で「アウト!!」例のリーダー君が「バウンド、バウンド」と叫びました。と、すかさず「ピーッアウト!! 君(あたった子)、出なさい。」リーダー君はその子にかわって抗議にいきました。が、とりあってももらえません。

こんなことが三、四度、おこりました。ゲームの様子が変わってきました。子ども達を中心に见えていたゲームが、この先生中心に回りはじめたのです。リーダー君

は、抗議してもききいれてもらえず黙りはじめました。不満を体一杯にみなぎらせて、さっきまでの寛容さはなくなり、相手チームの違反を見逃がさず、言いたるようになりました。大きく見えていたリーダー君は、この先生の影に隠れてしまいました。今までは、二チームに分かれていても、「すごい」「やるーっ。」などの声がかい、皆で一つになってゲームを楽しんでいたのに、まさに、敵を破ることが目的になってきました。

先生って一体何ですか？ 審判ですか？

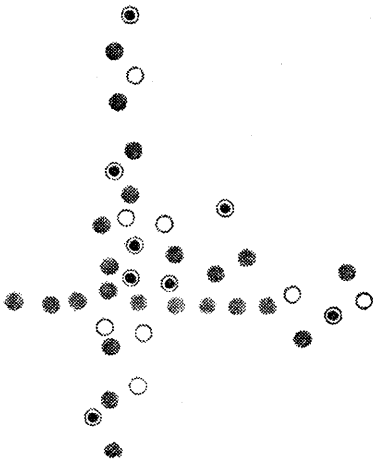
この先生の来ない時の方が、ずっと寛容な楽しいゲームでした。来てからは、確かに「正しい」ゲームになったかもしれないが、ちょっと後味の悪いゲームになりました。全校ドッチボール大会の勝敗をきめるための試合ではないのです。放課後の遊びなのです。

そういうえば最近の子ども達をしている事って、少年サッカー、少年野球、競泳等、勝ちを争う競技型が多くなり、リーダー君を中心としたドッチボールのような遊びが少なく思います。

さらに私をガクンとさせるに決定的だったのは、最初に書いたブランコでおもしろい遊びをしていた五人の男子に、この先生が叫んだのです。「あ、ここで遊んでいたのね、何してるの！ 学童の子はこっちでドッジボールよ。○○君、○○君……」それでも彼らは、互いに顔を見あわせただけで、ブランコを止めませんでした。再び、この先生、「来年はあなたたち一年生が、新しい一年生にドッジボールを教えてあげるんでしょう！ いらっしやい!!」彼らは、びっくりして、広場へ走っていき、

ドッジボールに入りましたが、すぐにあてられて外野へ。外野でもボールは来ず、所在なくつまらなそうので、最後までブランコで遊んでいた時の輝きは見られませんでした。

先生サマ、今の彼らに、半年も先に新しい一年生にドッジボールを教える事など関係ないではありませんか？ 今の彼らにはドッジボールよりも、ブランコでの遊びの方がピタリで、創造的で、全身全神経を集中させて遊んでいたように見うけられました。一才一〇ヶ月



の娘が近づくと、ちゃんと揺れを小さくしてくれましたもの。自分達で遊んでいたブランコでの遊びの方が、彼らの發揮した能力、彼らの得た力は、ドッジボールでのそれよりも大きな事は明らかでした。

「これではだめだ。」と思いました。放課後まで、遊びの内容までこのように管理されているのではだめです。しかし、公園のすべり台で、塾の鞆をもってチンタラとアイスクリームをなめているのも困ったものです。あの先生が来るまでの学童保育の子どもの遊びだけが遊びらしい遊びだなんて、他に遊びが見られないなんて悲しい限りです。

やはり、一番しんどい事だけれど、遅々として歩みは遅いだらうけれど、自分で生き生きと遊べる子どもにもなっていくより、自分の子を他人にまかせず、乳幼児期から地域で一緒になって遊ぶことしかないのだと、当然の結論に至ったのです。さらには、地域のおかあさん仲間と、ああでもない、こうでもないと一緒に試行錯誤していきながら、母子共々に、力を貯え、育ちあう関係

を、大切に少しずつ築き上げていこうと思うのでした。

◇ ◇ ◇

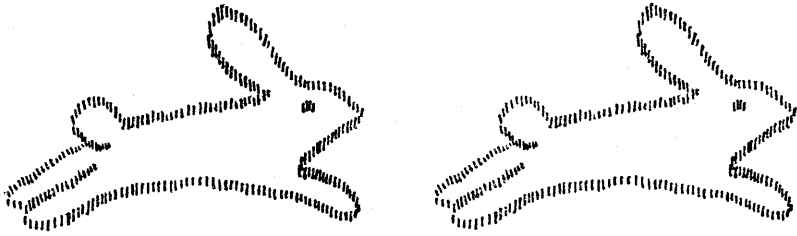
それにしても、どうしてこう管理、管理なのでしょう。落ち葉を集めてたき火をし、焼き芋を楽しんだ公園も「管理上」の名目で、きれいに掃除されました。わからないではありません。でも、落ち葉も、枯れ枝も、木の実もなくなり、娘達の遊びが半減してしまったのも事実です。

産まれる日時まで管理されて、(自分の意志ではなく、他人の(病院)の意志都合で)産まれてきた子が多い。今、管理された環境で、管理された時間と空間で、育つものは何でしょう。

娘達が大切な一日一日を積み重ねて、大きくなっていきます。現状を憂えているだけでは将来、娘に叱られそうです。娘の成長に遅れぬよう、私も地域の母親として力を貯え、育っていこうと思います。

父親參觀日に話したこと

燕 木 寿 江



—— 幼児期に幼児教育を ——

幼稚園というところをご承知のように、就学前の幼児に適当な環境を与え、心身共に助長することを目的としているところで、子どもの活動を洗いざらいひき出したところから六領域が生まれました。言いかえれば、「子どもが食べた食品を分析した結果、六つの栄養源からなっている」と表現した学者もいます。カルシウムがよいから、といってそればかり与えては消化不良をおこしますし、栄養だからといって錠剤だけを与えたのでは、生きる力にはならないでしょう。

願書を取りにいらっしゃる方が、「市ヶ尾幼稚園の特色は何ですか？」と言われます。ためらっていると、「音楽とか、体育とか、漢字教育とか、特別に力を入れてるのは何ですか？」とつけ加えます。「特色がないのが幼稚園教育です」と言いますと、「具体的にどんな教育をするところなのですか？」矢継早に聞かれます。「文部省の教育要領に添って、幼児期に幼児教育をするところ

です。」と、ごくあたりまえのことを真剣に言います。まだ満足がいかないうるので、子どもの生活は遊びです。遊びを通して学んでいきます。と言うときまっで、「じゃあ一日中遊ばせておくのですか？」と問われます。遊びを通して学習するところです。例えば、「社会」の領域をとりますと、「個人生活における望ましい習慣や態度」「社会生活における望ましい習慣や態度」がうたわれており、その中には「友達の喜びをいっしょによろこぶ」という箇所があります。昨日、ほんとにどこに記されてあったかしら——と確かめました。見覚えのある鉛筆の線がついていました。この三十九年の教育要領というものは読み応えがあります。今回の改正では、「私立の独自性を生かし」という項目は、隠れ蓑的言葉で、一部教育産業化してしまった幼稚園もあり、この部分は削除されると、文部省の初等中等科教科調査官が言っていました。

——大黒柱——

「文部省に最初の対策協議会が発足し、長い眼で問題を解決していくことになりました」などと、ニュースでNHKのアナウンサーが真面目な顔で言っていると、情け無くなる場合があります。我が子の友達関係を（教師にとってもクラスの子どもは我が子でしよう）どうしてお役人さんに解決してもらわなければならないのでしょうか。それ程、家庭が精神的に貧困になってしまったのでしょうか。「育児は雑事」という言葉はやっぱり日本語なのでしょうか。「生命の電話」なるものもあります。が、このおかげで一命をとりとめた方もあったでしょうが、他人に電話をかけるのではなくて、おうちのお母さんに、そしてお父さんに話せないものでしょうか。お父さんは大黒柱である筈です。辞書を引くまでのことありませんが、「初建における大切な柱」とあります、もろもろの難問を一緒に考えてくれる大黒柱、お父さんに縫っていただければ大丈夫、安心と言った大黒柱に名実共に是非なっていただいたいと思います。あたりまえのことがあたりまえでなくなっていく今の世の中の流れを、一時

とめたいと思います。ここで立ち止ってみんなで考えてみたいのです。

幼稚園は、子どもの時計に大人の時間を合わせます。

大地に平伏して土と語っている子どもの時計を大切にします。どの時代に子どもに合わせられる時を持つことができるでしょうか。一時間目国語、二時間目算数、とすぐ小学校に入ったら、時間割に左右されてしまいます。

こまぎれ保育では、保育とは言えないでしょう。私のクラスの子どもが、こんなことを言っていました。「火と金がスイミングでしょう。土曜日がヤマハ、水曜日が英語、お父さん残った日に塾へ行けて言うの」と、訴えていました。これも人まかせの教育なのではないでしょうか。お金で人を雇っている。お金が支配しているようなもので、父親の義務を果していると言えるでしょうか、子どもが家庭で遊んでいるということがそんなにも不安なことなのでしょうか。目先の情報に流されないで、自分の子どもを可愛がるように人の子どももいとおしみ手をつないだら、その中の子どもの輪も広がって

くことでしょう。陰湿と言われているようなじめなおきないことでしょうか。お母さんだけに子どもをまかせないで、お父さん、あなたが不断の大黒柱になっていたきたいと思います。

—— 個性的ということ ——

NHKで、「二十一世紀は警告する」という番組をやっていました。難しいことは頭に残らないのですが、自分が必要なことは、不思議と聞いているものです。「文明の前に森林あり、文明の後に砂漠あり」の警告も、この開拓された地に住んでみるとよくわかる言葉であり、始めはブルドーザーの音が気になってしかたがなく、見る見る地肌をさらけ出す山が悲しかったのですが、だんだんに慣れてしまいました。「慣れる」ということは怖ろしいことですね。

その番組の中で五重の塔を修復したときのことグラフNHKに載っていました。「四隅の柱なども微妙に高

さが違うのですが、驚かされるのは、全部わざとふぞろいにしたのだとしか見えないということ。同じ長さに切りそろえるのは簡単な管ですが、当時の大工の棟梁がそれをせず、確かな目で全体をにらんで部分のそれぞれを個性的にしたのだとしか考えられません。その結果、完璧なまでの美を千年の風と雪に耐える堅実性が生まれました。画一的な部分からではなく、個性的だからこそ不ぞろいであり、従って自律性をもっているような部分の群れが一つになって初めて法隆寺や薬師寺の美と安定性がある。その事実には教えられるところが実に多い」と、チーフディレクターが語っていました。何か今の「教育」に対する警告のように響きました。

——子どもの目の高さになって——

日本橋の丸善で行なわれている絵本の原画展に、いつの頃からかきまっていくようになりました。どんな絵本を子どもに与えたらいいか、とただ職業意識が濃厚で、

楽しみに……というより、がつがつとあさるように画面に喰い入り、人をかきわけて最前列にでて、眼鏡をはずして（老眼の為）顔を寄せて、作者の言葉を一字、一字読んでいました。ベルリンに生れたヘルメ・ハイネが、「ちょっとだけ死ぬことができないように、ちょっとだけ描くなんてできないから——」と、自分の絵の下に記されてあった言葉を見たらますます絵本作家が好きになりました。若者が……二十代の人達が多いのが将来を見通すように嬉しく、その人達の楽しそうな雰囲気も大切にしたい、と思いつながら原画の世界に魅き入れられていきました。

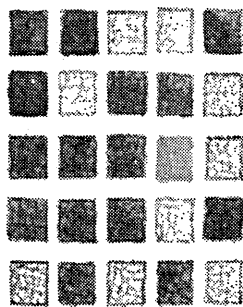
この五月には、ユネスコ・アジア文化センター主催の絵本原画展に西武にいきました。スライドで見る絵本の世界の公開座談会もあり、会場は予約の葉書を持った人でいっぱいでした。グランプリをとった原画を中心にスライドで写しては説明してくださいました。児童文学者の渡辺茂男、絵本作家の杉田豊と、マリー・クリスティーナがその司会でした。お二人の先生の名前は生前の周

郷先生からよく伺っており、絵本を通して親しみを覚えていたので、すぐにその雰囲気の中に入れました。子どもの喜ぶ絵を大人側から見ているのかと思っていました。お二人共おっしゃることは、「世界中の絵本をつくる人達が、自分の子どもの日に帰って、その日に問いかけながら、いいえ、子どもそのものになって描いている。」ということをお伺って胸が熱くなりました。「これだ——。これなんだ。」世界の絵本作家の大人達が、世界の子ども達にどんな夢をたくすか、どんなメッ

セージを送りたいのか——、それは子ども自身にならないければ、子どもを知ることにはできないし、描けるものではないでしょう。誰だって子どもであった日があった筈です。

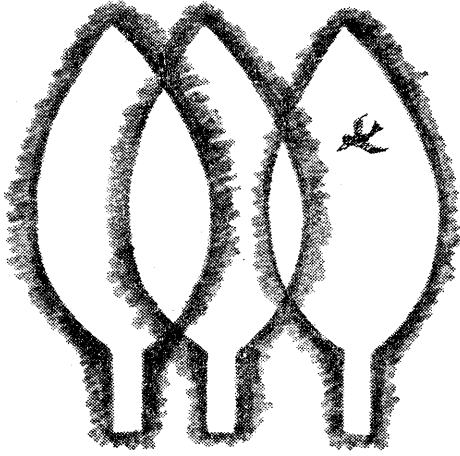
お父さんも、子どもの目の高さになるということは、勿論、腰をおろして姿勢だけを言っているのではなくて、子どもの目線になって、即ち子どもの視野に立ったときに、子どもの本当の姿が見えてくるのではないでしょうか。

(市ヶ尾幼稚園)



坂元彦太郎先生を囲んで

(第一回)



長年幼児教育に取り組んでこられた坂元彦太郎先生を囲んで、お話を伺いました。坂元先生は、岡山大学教授、お茶の水女子大学教授等を経て、お茶の水女子大附属小学校長、附属幼稚園園長をつとめられ、現在は十文字学園大学女子短大の学長でいらっしゃいます。

出席者

立川多恵子（十文字学園女子短期大学教授）
中村 悦子（大妻女子大学助教授）
守永 英子（お茶の水女子大学附属幼稚園）
本田 和子（お茶の水女子大学教授）

——坂元元生を囲んで、昔なつかしい方たちからいろいろなお話を伺うことにいたしました。ひところ先生が長らく顧問として参画なすった「キンダーブック」の編集をおひきになったと伺ったものですから、それらをめぐる、様々な思い出やらエピソードやらを伺っておきたいと思えます。それから、この機会に、今までそれこそ何十年か幼児教育の世界を歩いていらしたわけでございますから、そこで体験なさったことなども伺いたしたいと思います。

お生まれはいつでいらっしゃいますか。

坂元 明治三十七年一月二十五日。日露戦争が始まる十日位前ですね。ちょうど及川先生が私より一〇才上で、その十一才上が倉橋先生なんです。

——先生は「キンダー・ブック」の発刊にも倉橋先生と携わっていらっしゃるんですね。保育絵本の本当の先駆的な役割をとった「キンダー・ブック」を戦後どのような発刊されて、どういう御苦労をなさってきたかお話しただければ……と思えます。

坂元 僕は倉橋先生の遺言で「キンダー・ブック」と関係したつもりなんです。ちょうど戦争直後に私が文部省に来て、いろんなことがわからず、相談相手が誰もいない時に、倉橋先生があらゆることについて相談相手になってくださった。教えていただいたことが頼りになっていろいろな学校教育の骨組ができたんです。

そしてまあ、先生が幼児のことを一生懸命やろうとなさったのに誠に感激して、それから私も倉橋先生と同じようにやるようになっちゃったんだね。倉橋先生の後を継ぐ、というと語弊がありますが、残された仕事をやるかと思ったことが一つ。

それから、また直接に頼まれて「キンダー・ブック」をやったんです。倉橋先生は三〇年近くやってこられた。ですから、それより短い期間にやめる訳にはいかなかった。ちょうど三〇年たったときに、たまたま病気がなったものですから、やめさせてもらったわけです。

倉橋先生との出会い

——先生も結局倉橋先生と出会われて、幼児教育に興味をおもちになったように思われるのですが。

坂元　そうですね。僕が初めて倉橋先生にお会いしたのは、昭和十五年の秋だと思います。戦争が段々盛んになってきた時で、教育界が国民学校を作って、一連の教育改革が計画されている時代でした。その時、国民精神高揚のためとかいって、一種の学会みたいなものを開いたんです。それに、私が小学校の方の代表、倉橋先生が幼稚園の代表として選ばれて、発表しました。その時に初めてお会いしたんです。

——そうでしたか。

坂元　少しさかのぼりますとね、私は大学を出てから師範学校の教師になったのですが、次第に、小学校の教育、特に低学年、僕らは幼学年といったのですが、に興味を持つようになった。そうした時に、倉橋先生の一reviewを読みまして、非常に感銘が深かった。

それから、滋賀県の師範に転任し、そこで付属の主任になりましてね。そこで幼学年に力を入れて一生懸命や

ったものです。

倉橋先生もね、いろいろなことをなさって、それから幼児の教育に移っていった。ですから、私もいずれば幼児の方にいくかもしれない、という予感がありました。そんな時倉橋先生とお会いしたんですが、その時、先生は突如として「大東亜共栄圏」という言葉を使って、それにふさわしい幼児の育成をなくちゃいかん、という発表をされました。

「ああ、この先生も大東亜共栄圏って言うようになったのか」と思うと同時に、そうしなければ身が守れないし、倉橋先生の場合は、本当に日本の幼稚園の代表なんだから、自分が何かで落とし入れられたようなことが起こると、全体に類を及ぼす、というようなことを考えられるんだな、と思いました。

戦争中、先生はすっかりあんな風になっちゃった、って非難する人もありますけれどね。当時は当然なんです。向こうの爆弾が落ちてくるわけですからね。お互い同志を守るっていうことが必要なんで、その上で最高の

譲歩をされたわけです。決して一〇〇%屈服したわけではないから、逆に当局から疎んじられてましてね。非常にいじめられましたよ。戦争中には、例えば『幼児の教育』とか、紙をほとんど止めるって脅かされて、それで先生が泣きついたりね、いろんなことをなさっているんですね。「キンダー・ブック」という名もむりやりに変えさせられています。

それから、戦争が一番激しくなった戦争終末期になると、3つか4つ残っていた雑誌を統合して、「御国の光」っていうのを出した。

——「日本の子ども」っていうのもあったようですが。坂元「御国の光」っていうのは「キンダー・ブック」の改名だったかな。最後が「日本の子ども」だったと思います。

幼稚園から幼児園に？

それ以来、先生とお目にかからなかったのが、昭和二十一年に再会しまして、学校教育法を作る際にお世話に

なりました。

私は、その時、当時の文部大臣から呼び出されて、青年教育の振興を頼む、と言われていたんです。

当時の高等学校とか、中学校とかはもう一種の廃虚になってましたからね。その中から新しい制度をつくっていかなければならいんです。幼稚園もそうでした。特に幼児教育のところは全部私ですが、誰も教えてくれる人がないものだから、本当に苦労しました。それで一々倉橋先生に相談したんです。

その時、一番の問題は幼稚園という名前でした。私は幼稚園を幼児園と変えた方が、一般普及をするためにも、また大衆的な教育のためにも、いいんじゃないかと。国民学校を小学校に変えますから、幼稚園も幼児園に変えた方がいいって、私は正直思ったんです。ところが、倉橋先生に言ってみたら、倉橋先生は他のことは私の言ったことにほとんど賛成して下さったけれど、この時だけは断固として、「変えないでほしい」とっておっしゃった。

それで私もそれだけは譲ろうと。幼稚って言葉を調べてみたら、幼児のことなんですからね。昔の古語を新しい言葉に直すだけなんだから、それほど変えるとは私は思わなかった。今になってみると、倉橋先生の気持ちが良いわかるようになりました。その時は、倉橋先生がそう言われるのだったらそうしよう、と思って今に至っているんですが、そのことが一番印象にのこっていますね。そして、それから先生とは段々仲良くなったんです。

——先生が戦後の教育復活の時に文部大臣から呼ばれたいきさつについては、あまり存じないんですが。

坂元 そうですね。戦前、私は岡山の女子師範におりまして、そこに幼稚園がありました。もう児童中心な教育というのは小学校では出来なかった。だから幼稚園は、私の思っていることが自由にやれるし、実に楽しいし、しょっちゅう入りびたっておりました。私はそこで具体的な幼稚園のあり方を覚えたんです。

——文部大臣から先生が呼ばれて、学校教育法の制定に

尽力なさったのは、やはりそれまでの先生の自由な付属幼稚園の実験みたいのが……、

坂元 それを認めてた人があるんでしょうね。私はそれが不思議なんです。当時悪口言われたおぼえはあるけど、役所側が認めてくれて、引っぱられるなんて、想像もしませんでしたからね。日本って所は不思議な所なんですね。

附属幼稚園の10年間

——附属幼稚園時代の先生はいかがだったんでしょうか？

坂元 困っちゃうんだよ。皆さんには叱られたこともあるしさ。

——すごく頼もしい園長先生でございましたね。今でも先生のお言葉を支えにしていることがあるんですよ。

お茶大では珍しく、カリキュラムをつくったことがあったんです。その時先生は「これはね、しょっちゅう見なくたっていい。時々開いて見ればいいんだよ」っ

ておっしゃったんです。これは、先生が理論をもってきて、この幼稚園で実践をさせる、という姿勢ではなくて、実践しているものを大事にして、そこから先生が、少し外に説明できるようなものに形づくって下さった。

先生のこうしたお気持ちに現場は支えられてきたんです。

もう一つあるんですけど、研究会の時に、皆がやはりいろいろ心配しましてね。そうしたら、先生は「あなた方はね、そうすればいいんだよ。説明は僕がいくらでもしてあげるよ」っておっしゃって。本当に大きな傘を広げたような十年でした。

坂元 倉橋先生が、大体それに似たような態度をとってらしたんです。僕はそれに負けまいと思ったんですよ。

——ですけど、きっと先生にはいろんな思いがおりになって、ご自分の思いを保育の中に生かしてほしいという部分もおりになったんじゃないかと。その辺をうかがってみたいと思うのですけど。

坂元 そういう風に思っ下さるのは大変ありがたい。

それは、自分にも自分なりの考えがあるけれども、違っただうりにやってらっしゃる時には、もう一度そちらの立場になってみて、必ず解釈し直しました。

——そのへんを具体的に伺わしていただけるとおもしろいんじゃないかと……

坂元 そうね。たとえば、倉橋先生は子どもの描く絵の指導はほとんどなさらなかったでしょう。それと同じように、時間割がどうの、とかそういうことは平気で破壊的、革新的なことを言われましたけど、実際のこと、こんな歌をこんな風に歌ったがいいとか、こんな踊りをこんな風に踊った方がいいとかいうようなことは、おそらく言われなかったと思いますね。私はね、あれでいいと先生が思っただらしたとは思わないんです。でも、個人の見識は大事に思っただらした。それを大切にしたら、ということではないかと思えます。

その証拠に、昭和一〇年ですか、「系統的保育案」をお出しになりました。あれには単元保育といった欄もあるのだけれど、昔ながらの欄もあるんです。そういうこ

とを両立させて良いんだ、と思われていたと思うんですよ。

——そういえば、先生が絵画製作の展覧会をご覧下さった時に、自由な発想をしているものを指して「僕は一番気に入った」とおっしゃったことがあります。

坂元 私がそんなこと言ったのは、それが最初で最後かもしれないですね。そういえば、当時はいわゆる創美の運動が盛んな頃で、私はそういう面を皆さんに変えてほしかったですね。あの運動は大人のもっている審美観を投影したものですよね。

——子どものある部分を強調して、大人が満足するような……。女の子が絵を描く時にはどうしても女の子を描いて、チューリップを描いて、おひさまが光っている、ということが多かったんですけど、先生は、それが子どももの安定した気持ちの現われだ、とおっしゃったことを覚えています。

坂元 そう。チューリップが一生涯いちゃ困るけれども、時にはこういう絵を描いたっていいんだ、って言い

ましたね。まあ二〇年も前の話ですね。

そういえば、お茶の水はまだハトポッポ体操をやっているんですか？

——先生、それ、何年か前にやめましてね。ハトポッポ体操で、子どもが生活を中断されて、おもちゃを放り出していくんです。そういう形が不自然だ、という声がありまして、やめたんです。

坂元 私はやめるにも理由があると思うし、やるにも理由があると思います。

文明社会に住んでいますと、やりかけたものをパッと転換して、生活が変わるといふこともある。だから、体操の時とお帰りの時と、それからお昼の時と、この三つくらいはきちっとして、いつの間にやら習慣ついてしまっう、っていうのは、その他の時に自由に遊べる、逆に垣根になるんじゃないか、とも思っていたんです。ですけどね、やめるにも理由があります。どの発達段階の子どもも一遍に線が引かれる、というのは多少無理だと思っ

ていたし……。

だけど、垣根みたいなものが一方ではきちんとして、他のことでは大目にみる、っていうのがいいんじゃないかと思います。何もかも大目にみるのではなく、どこかできちっとしながら、大目に見ることはどこまでも大目にみていくっていうのがいいと思いますね。

ただ、幼稚園の子どもには、いじめられましたね。倉橋先生もよくいじめられて逃げて帰ってきたっておっしゃってましたが。

——皆がまとわりついてね。先生、お背が高いから、足に皆がつかまるんですよ。

坂元 今でもね。イチョウの木を見ると、あそこで私のカメラのキャップをポーンと投げたやつがおるんで、まだあそこにあるかなって思いますよ。

——まあ、そうなんですか。戻らずじまいですか。

坂元 それから、眼鏡。私がいかけた眼鏡を置いておくと、ひょっと眼鏡を隠しちゃってね。長いこと出てこなくて、困ってた。ふっと持ってきてくれたりしました

——先生は良くいらして、子どもを個人的に見て下さってましたよね。子ども全般ではなく。本当にありがたかった。今の思い出話を伺って、私、今の自分の立場がよくわかってきたような気がします。

(以下は次号に続きます)

× × ×

はじめての子ども達との出会い

上坂元 絵 里

。入園式の日

子ども達とともに毎日生活することが出来る。この事は、二十人の子ども達と実際に対面するまで私にとって、夢のように思えました。入園の準備のために、名札に名前を記しつつ、この子はどんな子かしらと思いをはせるばかりでした。四週間の思い出深い実習をさせていただいた、園内を見渡しても、子ども達がやって来てこそ本来の幼稚園の姿なのだと感じていました。

入園式の日、子ども達や母親の誰よりも、私が一番緊張していたと思います。右往左往する担任の様子はいかにも心もとないものだったのではないのでしょうか。

ポーツとした表情でフラフラと歩き回るA子ちゃん。

何だか半分は宇宙人のようで、何を考えていたのでしょうか。手を引いて、いすに腰かけさせてあげようとしたら、ギュッと手を握りかえしてくれたB男君。緊張した私はとても励まされました。さっそく、初めての幼稚園の探索を試みようとしたのに、とどめられて泣き出したK君。そばでみていたY子ちゃんは、いつの間にか自分のポケットからティッシュを取り出してわたしてくれました。何て気の利いた思いやりがあるのかと感動してしまいました。自分もついさっきまで「ママノママノ」と泣きべそをかいていたのですが、体は大きいのに、何とも頼りなげにメンメンしていたT君もいました。でも

泣きながら、しっかりと私の事を観察していたようです。

この二十人の子ども達と出会えて、新米保育者の私は、嬉しさに顔がくずれっぱなしでした。どうしてそんなにかわいいのでしょうか。このようにして幼稚園の日々が始まりました。今年の入園式は、お庭の古い桜の花が見事に色を添えてくれました。

○子ども達との生活

子ども達にとって幼稚園の生活が自分のものとなり、楽しいものになって欲しい。そして、私は、少しずつ子ども達の気持ちに近づいていきたい。そんな思いで私の保育が始まりました。しかし、一人一人の子どもには、これまで生きてきた三年間の生活があります。三年と言えば、僅かな年月のようですが、人間の命の最初の三年間の重みというものが、強く実感されるばかりでした。生まれた時から、子どもは、ある環境や価値観の中で育ってゆきます。子どもとともに生活しているうちに、子

どもを通してこれほどくつきりと親の姿が見えてくるのかと、驚きもし、恐しさすら感じました。「子ども達を知る」ことは、最初の目標でもあり、しかも、いつまでも続く目標になりそうです。

A君は、私にとって理解しにくい子どもでした。一人で黙々と遊び、絵本を読んだりして彼なりに幼稚園での生活を楽しんでいるのかとも思えました。私への働きかけも多くなく、お友達との関わりも余りみられません。した。けれども、毎朝元気に登園してくれるので、気にはなりつつも、他の働きかけの強い子どもの方へ関わる事が多くなってしまうました。ところが、一学期も終わりに近づいたある朝、A君はぐずって泣き出してしまい、なかなか母親と離れられませんでした。母親が帰ってからも、私のことを必死で目で追い、必ず近くにいるという様子でした。A君は、もっともっと私やお友達との関わりが欲しかったのです。この当然のような事に気付くのに長い時間がかかってしまいました。随分、こらえていたであろう、A君に対してとても申し訳ない

ことをしたという痛いような思いと、力をふりしぼって自分の気持ちを表現してくれたA君への感謝の気持ちとで、この日は私にとっても忘れられない一日です。

ある保育者としての大先輩の方が、子どもに何かいいことをしてあげようなどと考える前に、子どもの持っている良いものを失わせることがないように配慮するだけでも大変なことだ、と言われた事がとてもよく実感されます。

また、子どもと共に生活することが出来るという有難さを充分承知しつつあるつもりでいながら、自分では気付かず、自分の思いで子どもを動かそうとしていることも多かったようです。今、子ども達はどんなことを思い行動しているかを考えているつもりで、自分の考えを押しつけていたりするので、帰る時間が近づいているから、早く片づけて静かになって欲しい、といった大人の思惑ばかりにとらわれて動いている時は、子どもの心が全く見えて来ないようです。「子どもの気持ちを大切に。」と言葉で言うのは容易ですが当然のように思えることほ

ど難しいと思えます。子どもの為とやってやっていると意外に子どもには通じず、深い思いもなしに、子どもと関わった事が、子どもにとってはとても嬉しく、幼稚園がより楽しいものとなるきっかけになることもあるようです。

○子どもに助けられて

家庭という小さな最初の社会から、幼稚園という随分大きな社会に仲間入りした子ども達。その子ども達を迎える私としては、三歳のあなた達がどのくらい自分を表現する術を知り、どのくらい大人の手助けを必要としているのかといったことを、書物の上での僅かの知識以外何も知りませんでした。

二十人の子も達が、幼稚園で生活している時には、幼いながらも一人一人が大きな存在にみえるようです。お帰りのあいさつの後、駄々をこねて母に抱きついてくる姿などを見るとずっと赤ちゃんに見えて、不思議な思いもしました。

でも、子ども達の適応する力には、感心させられま
す。お庭で遊んでいたら帰る部屋がわからなくなって泣
き出していたり、年長さんに混じってすっかりクラス写
真におさまっていたりした子ども達が、数日もたつと、
自分の本拠地はしっかり心得て戻ってくるようになりま
す。お友達や保育者のすることをとでも良く見ているの
です。保育者自身が、自分の動きに常に細心の注意を払
わなくてはいけないということがとてもよくわかりま
す。

また、子ども達の方から私に働きかけてくれること
で、助けられているなど感じることも多くなって
来ました。二十人の子ども達の動きを知り、安全を守る
ことは、保育者の第一目標ですが、「○○ちゃんが泣いて
るよ。」「たいへん／たいへん」と子ども達の方から知
らせに来てくれたこともたくさんあります。しかし、そ
れだからといって子どもも任せにはいけないというこ
ろにいつも引き戻されます。子どもがその力を発揮し
てくれると、つい任せたくなくなってしまったりするので

が、いつも見守り、必要があれば援助することを忘れて
はいけないと思います。

いつも迷って、子ども達に迷惑ばかりかけてしまっ
ている私ですが、「ある母親が、子どもはいやなことは忘
れてくれますから。」と言われたのに少し勇気づけられ
ています。随分、たくさんあなた達の気持ちをくみ取れず
に小さな心を傷つけてしまっているかもしれないです。で
も、残りの一生懸命やっている分で何とかいやな事は忘
れて下さいとお願いしたい思いでいっぱいです。早く、
あなた達に悪い影響を与えることのない保育者になりた
いと思っています。

○これからの事

最初の一学期は、頭の中が子ども達のこと保育のこと
でいっぱいのまま過ぎてゆきました。今はきつと、霧の
空に幾つかの星が霞んで見えているような状態です。
う。一つずつ輝く星を見つけてゆきたいものです。

この仕事について、本当に楽しく思われることの二つ

に、自分の生活と保育の仕事との密なつながりという事があります。毎日が自分自身を問われ続けることであり、つらくもありますが、日々の生活がすべて保育の中で生かされます。町を歩いていても、電車に乗っていても、母と子の関わりを垣間見て、様々な事を教えられます。講演を聞いていても今迄、学生として聴いたのとは全く異なり、実感として伝わってくるものがあります。話を聞きながら、本を読みながら、日々の幼稚園での生活や子ども達の顔が心に浮かんでくるのが、何とも心地良く感じられてなりません。

また、幼稚園では自然をとっても大切にしています。そんな環境の中で、小学生の頃大好きだった雑草や花々につき合う時間もぐっと増えました。いろいろな事に興味を持って経験してみたい。それが、直接・間接に日々の保育にも意味をもってくるのです。自分を豊かにすることで、豊かな心で子ども達を触れ合うことが出来るのです、そんな事を思うと、本当にやりがいのある仕事に感じたことを感謝したい気持ちでいっぱいになります。

とはいっても、夏休みに入ってしまった、三ヶ月余りの子ども達との日々が、また夢のように思われてしまいました。ともすれば、のんびりと日々を過ごしてしまいがちなにもなります。日々、伸びてゆく子ども達を追いかけ、自分も成長していくことはとても大変なことでしょ。けれどもいつまでも、子どもとともに、子どもを思っていて生きる保育者でいられるよう、息切れしないように歩んでゆきたいものです。そして、子ども達のあのぱつと輝く表情にたくさん出会いたいと思っています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

子どもたちのこと

九、ぼく、がんばるぞ！

大橋 利恵子

J男は二人兄弟の末っ子、おじいさん、おばあさんにかわいがられて育った秘蔵っ子である。幼稚園に入る前から、母親は心配だったようで、「きつとうまくやっっていけない」と思う気持ちと「でもあの子なら」と思う気持ちが複雑に交差していたようである。

四月入園式から一週間、第一関門は思ったより順調に、しかし、とても緊張して過ごした。ほとんど声を聞かない日々だった。

五月になると、友だちとブロックや砂場などで遊べるようになり、少々元気が出てきた。教師にも少しずつ話ができるようになり、やれやれ順調で何よりと思っていたのに、第二関門はちゃんと待ちうけていた。それは給食だった。好きな物だけは食べるのだけれど、それはごくわずかな種類でほとんど食べれない。給食のない土曜日が大好きな日になってしまった。それでも、周囲の子と共に、少しずつがんばって食べるようになり、一ヶ月もたつと時間はかかっても一応食器をからっぽにすることができるようになり「せんせ

い、たべちゃったよ」と大きな声で報告できるようになった。

こうして迎えた六月がJ男にとっては一番よい月だったようである。家でかたつむりをつかまえて持ってきたのをみんなに認められ、その日から、一匹か二匹のかたつむりをつかまえてくるようになった。もうすっかり園になじみ、悩みなどないかのようにみえたのだが、第三関門もちゃんと待ちうけていた。それは何とプールだったのである。

七月一日 プール開き、その三日前ぐらいから家では「いやだな 幼稚園休もうかな」と言っていたそうである。しかし、少々寒い日だったので、短時間で切りあげたことも手伝ってか、初日はごくスムーズにプールに入れ、J男も「何でもないや」と思えたようだった。家でも「もう泳げる」と意気さかんだったようである。

その後少し慣れたある日、「ワニ歩き」と称する水の中で足を伸ばし手で歩くことに挑戦していた。J男にもやってみるように薦め、おなかをかかえて手を下におろさせた。J男は手足をバタバタさせたので、そのまま手を離し「できそうじゃない？」と聞くとJ男はいそいでその場から離れていってしまった。このことがどんな意味を持つことになるか、その時の私には予想もつかず、他の子へと手を伸ばしていった。

その日のJ男は何も食べない。いつもならすぐぐんばってたべるJ男だけに心配になり、熱をはかるとほんの少しだけ熱がある様子。とりあえず、母親に連絡して帰した。翌日、朝泣いて登園をいやがる。少々疲れぎみなのではなどと気楽に考え、その日は一応半日で帰した。そして次の日、さらに登園拒否、給食もほとんどたべない。私にはわけが

わからず、ただ「あんなにがんばっていたのにどうしたの？」と聞くのみで……。その次の日、母親から「プールカードに。印はつけてなくても健康ですので入れます」と連絡がきて、はっと気づいた。そうか、あの時、こわかったんだ！

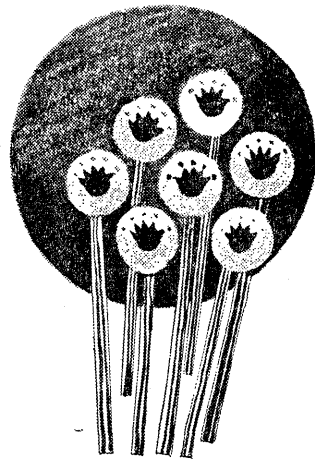
原因がわかれば対策もたつ。もともと気が弱すぎるけれど、がんばる気持はあるJ男。ワニ歩きを自分のものにしてしまえば、きっと元にもどれる。そう思った私は、よいお天気でも水に入りたくなるような日まで待った。そして、その日、水に入るのがとてもいい気持の日、浅い所でまだワニ歩きのできない子に一人一人時間をかけて指導していった。J男にも、絶対抱いているからと約束して、段々に水へ入れた。そして足をのばして歩けた時にすぐく拍手をして喜びほめた所、もう自信を持ったらしく、すぐに友だちにもやってみせていた。その日以来、またあのがんばるJ男がかえってきた。

4才のこのデリケートなる子ども達に、何をどのように経験させていくのか、それがむずかしいということをまた実感した次第である。

(岐阜北幼稚園)

おかあさんがおこった

矢崎 淳子



「ねえ、おかあさん。なんかおなかすいたア。」

さっきから、なんべんも、いっているのです。でも、おかあさんは、しらんかお。ペラ
ンダで、せんたくをしています。よこでは、いもうとが、なにかを、かちやかちやいじっ
ています。きのうも、そのまえも、ずっと、雨がふっていました。せんたくものは、おへ
やのなかにほします。したからみあげるとジャングルみたい。きのうはジャングルにいる
つもりで、たんけんごっこをしていたくらいです。

「ねえ、おかあさん、なんかたべたい。」

おかあさんは、こちらをみると、すこし、口を、とんがらせてみせました。

「わかこちゃん。あさごはん、たべたばかりでしょ。あんなにたくさんたべのこしちや

つて、いまごろおなかすいたなんて。テーブルのうえにまだあるから、たべなさい。」

わかこは、テーブルのうえをみました。わかこのおさらが、ポツンとひとつ、のっぺいまま。おさらのうえには、ほうれんそうのゆでていためたようなのと、たまごのはんぶんがおはしでつつつかれて、よこをむいてのっぺいまま。

「こんなのやだ。たべたくない。」

「じゃあ、たべるものないわよ。」

「ハムちょうだい。」

「ありませんよ。ぎゅうにゅう、のんだら。」

「いやだ。だって……さつきから、おなかすいたっていつてるでしょ。」

「なにがだつてですか。おかあさんはあきごはんをちゃあんとたべないひとには、おやつはあげませんよ。」

「いやだ。おやつほしいよう……うえーん。」

わかこはなきだしました。いもうとがこつちをみて、にこにこしています。おかあさんは、せなかをむけて、おせんたくのつづきをはじめました。

「おかあさん、ねえ、おかあさんたらア。」

「なあに。」

「あそんで。」

「なにして？」

「なんでもいいから。えほんよんで。」

「あのね。わかこちゃん。おかあさんね、いまやってしまわなきゃならないことが、こゝんなにいっぱいあるの。」

おかあさんは、りょうてをひろげてみせました。

「おわったら、あそんであげるから、いまはむこうで、あそんでて。」

「おかあさんのバカ、ケチ、ケムシ。」

「そうそう、バカ、ケチ、ケムシでけっこうよ。」

わかこはとおりがりに、いもうとのあたまを2回たたいていきました。こうして、あさはすぎました。わかこは、おひるまで、なにももらわないでいたでしょうか。いいえ10じのおやつに、ビスケットと、ほしぶどうをすこし、もらいました。ほうれんそうも、たまごも、たべないままで、おかあさんは、おやつをすこししかくれなかったのですが、わかこは、こっそりいもうとのぶんを、よけいにとったのです。なほこはおこりました。でも、このこはまだあまりしゃべれないので、おかあさんにいつけられないのです。雨はざあざあまだふっていて、きょうもおせんたくものはかわきそうにありません。

おひるになりました。おかあさんは、おへやにならんだ、せんたくものをまゆにしわよせて、ながめまわし、ためいきをつきました。

「みっかもこうだと、うっとしいわね。」

おひるごはんは、ラーメンです。

「わかこちゃん。みんなのおはしをならべてちょうだい。」

「ええっ。やったら、なにか、いいものくれる？」

おかあさんは、ちよつとよこめでわかこをみて、それからいいました。

「ラーメン、あげるわ」

「じゃ、やだよ。きのうもラーメンだったもん。」

おかあさんは、「ムーッ」とおおきなこえでいってから、じぶんで、おはしをならべ、いもうとを、いすにすわらせました。この「ムー」は、おかあさんがすこしより、もうちよつとだけたくさん、おこったときのこえなのです。

「いただきますしよ。わかちゃん、いすにすわって！」

「ちよつと、まって」

「まってるのよ。」

わかこは、このあと、おかあさんが、「10かぞえるうちにすわらないと……」というのをきいて、1からはじまって、8までかぞえたのをきいて、9のこえとどうじに、いすにすわりました。わかこは、おどんぶりのなかをみて、いやだなァとおもいました。だってあさのほうれんそうが、またはいつているのです。

「えーっ、こんなにたべられない。いやだ、このほうれんそう！」

わかこは、てでほうれんそうをつまみだすと、テーブルのうえにならべました。

「こらっ。なにするの。ちゃんとたべなさい。」

おかあさんの目が、よこにほそながーくなり、わかこをにらんでいます。

「なほこちゃんだって、やってるじゃないの。わかこばかり、おこって！」

おかあさんは、なほこをみました。なほこはてで、ほうれんそうとラーメンを、ぐちゃぐちゃにませながら、たべています。

「なほこちゃんと、あなたが、おなじですか！」

「こんなもん！」

テーブルのうえのほうれんそうをつかむと、なげつけました。かわいそうに、なげつけられたほうれんそうたちは、どこにくっついたのでしょうか。……おかあさんのかおと、なほこのかおと、それに、どうしたことか、なまがわきのせんたくもの日まで。

あつとおもうまもなく、せなかまでびくつとするようなおおごえ。

「コラァ！ わかこ！」

おかあさんは、まっかです。目はまえよりもっとほそながく、もう、カチンカチンにおこって、おはしで、ラーメンをかきまわしているのです。すごいスピードで、かきまわしているのです。おつゆはとぶ、やさしいはこぼれる。「あーあ、おかあさんばくはつだ」こんなにおこったのは、このまえはいつだったでしょう。わかこはおおいそぎで、いいました。

「ごめんなさい。ごめんなさい。……」

おかあさんは、まだ、かきまわしながら、にらんでいます。さらに、わかこは、10ぺんくらいいいました。

「ごめんなさい。ごめんなさい。……」

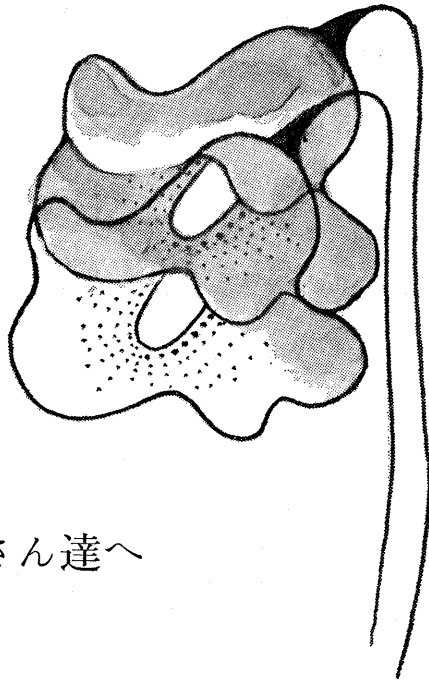
ラーメンを、かきまわしていたが、ぴたっと、とまりました。

「よし。きめた。たべたくないなら、たべないでよろしい。たべものをそまつにするのは、おかあさんはぜったいきらいなの。ゆうはんまで、おやつぬき、なにもたべないでいなさい！」

というわけで、とうとうわかこはほんとなにもたべずに、いままでいるのです。そろそろ、ゆうごはんときです。もう、おなかが、きゅうきゅうです。「ごはんよ」といわれると、わかこはいちばんにテーブルにつきました。ゆうはんのおかずは、ほうれんそうのはいったちやわんむしと、おさなかです。でも、ふしぎです。ほうれんそうが、こくこくおのどをとおります。ごはんも、おさかなはもちろん、にんじんまで。おとうさんが、おどろいていました。

「きょうは、わかこもおかあさんも、すごいしょくよくだね。なんでもたべてえらいね。」だって、ほんとうになんでも、おいしかったんですもの。もう、おなかいっぱいで、にこにこしちゃいます。これで、わかこのおかあさんがおこったおはなしは、おしまいです。おかあさんは、どうしたかって？ごしんばいなく。もちろん、もうぜんぜんおこってなにかいません。あしたは、はれになりそうだし、みんなのおさらはからになるして、うれしそうに、だいどころでうたをうたってますよ。

おわり



若いお母さん達へ

はるにれの会 橋本 都

皆さん、初めまして。

我が家の息子H（小学四年）は、きょうも卓球の試合があると、朝早く元気に飛び出していきました。お弁当はおにぎりの他に、Hの言によると力がもりもり出てきそうな野菜炒め、コロッケ、ウインナ等、お気に入りのメニューです。先日、Hのラグビーの試合をみたのですが、泥まみれになって走り、ぶつかっているのをみると、随分遅くなったものだと思います。

今、この十年間を振り返ってみますと、Hは、こんなに丈夫だったのでありません。アレルギー体質というのでしようか。扁桃腺を腫らしやすくて、風邪をひくと高熱が続き中耳炎を何度も繰り返し、アトピー性湿疹で掻き傷だらけになったこともあります。でもやっとこ

の頃では、お医者様には殆んどかからなくなりました。

Hの場合は、幸い友達と外で遊ぶことが好きでしたし、その中で自然に強くなっていったように思います。

勿論、友達と仲良く遊べるようにと願いつつも、遊べば遊んだで友人関係を心配したり、他家に迷惑をかけてお詫びに行ったりと、親としては困ったこともありました。

それから、体を動かすことが好きで、自分から望んで水泳に取り組みましたが、いくら好きなスポーツでも続ける間には気が持がぐらついたり、具合が悪くて中断したこともあります。

ですから、丈夫になったということも、しばらく経って子どもをみた時、やっと確かめられる程の歩みであったと思われるのです。

体の面でもこうなるのですから、ましてや心の面は大人のように、すぐには育っていかないのが当然でしょう。

Hが五才九ヶ月の時のことです。

☆二月末から三月上旬のこと。毎晩、いやに甘える。朝

もそうである。一つ一つの行動が後ろ向きである。「さあ着がえて。」「いやだいやだ。ママ着せて」といった具合で、二階までいくのも、おんぶ、抱っこといった有様である。祖父母は呆れて「こんなんでこまどり（年長組）になれない。」「どうしたんだらうね。もうおにいさんでしょう」と言うと、ますます暴れて泣く。

毎日きまって寝る時とか朝起きた時とか、親も忙しい時にぐずりだすのですから、いらいらして、つい大声を出したりしてしまいます。それが二月の末にHが通っている保育園のPTAに出席して、なんとなくそんなHの行動の理由がわかってきました。Hの組は春に最年長の組に進級するので、年下の子ども達の範となるよう、何でもよくがんばっているのだそうです。Hも立派にやっいて、泣かないし、友達ともよく遊ぶ「よい子」だということです。昼寝から起きると、五分以内に布団をたたみ、机やイスを用意することもやっつてのけ、かえって年長組より立派だと先生はおっしゃるのです。

今までならよく「こまどりにいじめられた」と言つて、その年長組になる日を待ち望んでいたはずなのに、そういう「おにいさんになりたい自分」と「おにいさんになるためにやらされている自分」そして「そうでないありのままの自分」とのぶつかり合いが、甘えたり暴れたりという行動になって現われたのではないかと思ひます。知らず知らず、我々まわりの大人にも「おにいさんになってしつかり」との思いが強く、それが余計Hを圧迫したのでしょうか。「もうすぐおにいさんになるね」と言うところにこりとするものの、同時に不安な自分もあるわけです。

このようなことは、子どもの生活の節目によくみられます。新しい環境に飛び込んだ時や、弟や妹が生まれた時もそうでしょう。Hは一人っ子ですから、そのような経験がなかったのですが、小学校に入る少し前に従妹が生まれました。従妹のSがまだお人形のような赤ちゃんのうちは、とてもよく遊んでくれました。イナイイナイパーをしたり、隠れんぼをしたり、それは精一杯のお兄

さんぶりであったと思います。ところがSが帰ると二、三日はまるで赤ちゃんのように母に甘えてくるのです。Sが大きくなってHの使うものを何でも「かちて(貸して)」と取り、真似をすると、いやいやこらえて貸すのですが、後で「S嫌いだ」と叫んで機嫌が悪くなったものでした。

さて、先程の例で、甘えたり暴れたりしながらも、Hの心の中にどのような思いがあったのか、記録からみてみましょう。

☆雪が降る。夕暮れ、ちょっと外出しようとした時、「ちよっと待って」と言つて庭にまわり、雪穴を掘つて、中に紙切れのようなものを埋め、にこにこ鼻歌を歌いながら戻ってきた。

その時理めたものが何であるかは、聞きませんでした。Hは紙切れに絵やら字やらを書くのが好きで、電話のメモ用に切っておいた紙はすぐなくなる程、いっぱい書いては捨てているので、とりたてて気にもとめませんでした。

八戸は北国ですが、そんなに雪は降りません。だから、こうして、たまに降り積ると、私達を幻想の世界へと誘ってくれます。月明りに輝く雪の結晶は、ほんとうにきれいです。

そういうえば、長い長い冬ですから、時々「はやく春が来ればいいね」などと、Hに話をしたことがあります。寒い地方の人間にとっては春を本当に待ち望み、それが、凍てつくような毎日を過ごす支えともなっているのです。それから、冬眠する蛙や熊の話もしていました。

きっと埋めることのおもしろさより、Hにとっても、やがて春の来る日を待っていたのではないかと思えます。自分だけの大切な物がいつか確実に大きくふくらんで出てくるのです。だから、ほんの一、二分のことなのにあんなにも満足気な表情であったのではないかと思えます。

この頃から、未来に関する遊びや生活の場面が多くなります。朝の目覚し時計やストーブのタイマーセットを

喜んでやるのは、やはり、自分で確実に未来が把握できるからではないかと思えます。そして仕事を完了するとやっと安心して眠るのです。タイマーのセットは今までは母がやっていたとても大切な仕事ですから、それができるといふことは、大きくなってしっかりと自分自身で認めているのでしよう。

それから、新聞の明日の番組という欄をみつけ、それが翌朝の自分のいつも見ている番組であることがわかると、とても喜びます。毎朝、新聞をとってくると、その箇所を手で押さえて誰にもみせられないようにするので、これも今までよくわからなかったのに、自分だけが確実に明日のことがわかってそれがうれしいのではないかと思えます。

いよいよ四月。Hは晴れてこまどり組になりました。「僕は大きくなったら学者になるっていったんだよ。」と自分の未来を積極的に語ります。ついこの間まで、ウルトラマンだったり、質問されると考えた拳句、わからな

いだったりしたのですが、本当に生き生きと言うので

す。そして、おもしろいことに「僕が赤ちゃんの時、かわかった？」と聞いてわざと赤ん坊の真似をして甘えてみせるのです。年長組になって、こんなにも大きくなった自分がうれしいのでしょうか。とにかく現実として大きいと認められた「自分」なのです。年長組になるために課題を果たさねばならない状況から、ありのままの自分に戻れ、それが大きくなったことと同等なのです。

それから、しばらくはHは夕方まで泥んこになって友達と遊ぶようになりました。「僕は大將だ！」と叫んでいるのを見ると、二月頃の泣きわめいたことが嘘みたいに見えたものでした。そして、保育園でも小さい子とふれあって、寝る時にかわいがったことを話すことが多くなっていったのです。

こうしてHの生活をみていくと、表面にみえた一つの行動だけで子どもの心を決めつけてはならないなあと思省させられます。どうしても、子どもの中に「○○がない」とみてしまうと、すぐ短絡的に「○○にするには」と考えて躍起になるものです。子どもの中に育とうとす

る芽があることを信じて、子どもを受け入れていかなければと思います。

さて、子どもと共に過ごす毎日は悩んだり困ったりすることが、つきものですが、とても楽しいものだと思います。折りにふれ、子どもの遊びをみていると、その懸命な様子に引き込まれていきます。

Hの幼児期の遊びをみるとおもしろいことに気がつきます。

☆お祭りや縁日には必ずお面を買ってもらい、かぶって母の所に来て「△△だぞう」と言い、パッととって大笑いする。また違うお面を前後にかぶり、鏡の前に立って、くるっと回ってのぞきこんだり、母のヘアピースをかぶって女の子の仕草をしたりする。

☆絵を描き、その上に白い紙を重ねて、「みてみて」と見せる。「何も書いてないでしょう」と言うと、イナイナイバーと一人でいつて紙をとり、ケラケラ笑う。また上から見ても下から見ても人になるといった絵を好んで描いたり、折った時と開いた時と違う絵に

なるものをよく作る。

☆手品を好んで家族にみせる。星をつくるのに紙を折って切って、パッと開いて喜ぶ。

こうした「変化」を楽しむ遊びは4才半位からたくさん見うけられるようになりました。Hの個性とも言える程、そのような遊びを楽しんでいるのですが、同時にHの内面にどのようなものが育ってきているのかはよくわかりませんでした。

例えばHはきっと変わる時の不思議な楽しさ、偶然のおもしろさに魅かれていたでしょうし、その変化を母や家族にみせた時、共通の楽しい時を味わうことをうれしく思っていたのではないのでしょうか。普段、忙しさにかまけて、じっくりと子どもと遊ぶことが少ないのですから、母が自分の誘いかけにに応じて驚いたり笑ったりすることはとてもうれしかったのでしょう。

さて、変化した時の喜び、驚きなどが遊びをすすめる原動力になっていたのに、半年位の間に次第に遊び方は変わっていきます。あれほど好きだったお面遊びも、あ

まり熱中せず、何度か使って、鏡の前でポーズをとってそれで終わりとなるのでした。子どもというのは風呂敷や紙や、他の遊具を加えて限りなく工夫できる才能がありますから、ただ飽きたのではないように思われませんでした。

記録からいくつか拾ってみましょう。

☆手品で皆を喜ばせるよりも、どうなっているのか、種トリックを探ろうとしたり、他のやり方はないかと、いろいろにいじってみる。

☆夜、自動車に乗った時のこと。道路際の反射灯のことが気になる。どうして遠くの時は見えないのに近くに來ると光るのかと聞く。反射テープの話をすると、そのことが不思議で、とうとう買ってもらう。テレビのスイッチなどに貼って電気をつけたり消したりして、やがて「本当だ」という。

☆折り紙の作り方の本を見て、一人で折り紙を作る。途中で、折り方がわからないので、横から「こようよ。」と教えようとすると、「言わないで」と言ってお

こる。

☆ハンカチでうさぎをつくる。その作り方を家族に秘密にするが、すっかり自信がつくまで、奥の納戸に閉じこもって誰にもみせない。行くとおこる。

☆アイロンをかけていると台を足で触る。危いので注意すると、どうしてしわしわがとれるのかと不思議そうに見ている。

このように、この頃の遊びは、どのように変化が生み出されるのが、Hにとって大きな意味をもってきたようです。ですから、遊びの形は、探ろうとし、質問し、試みるのです。いろいろな状況を自らの手によって変えていくのが楽しいのです。思い通りできない場合もなんとか獲得するまで懸命です。

一方、あれほど好きで毎日二時間位を費してきた積木やソフトブロックを使う遊びはほとんどしなくなってきました。本当にこんなによく遊ぶものかと思うぐらい次から次へと形づくって遊んでいました。遊具のうちでも、時にはお団子になったり、自動車になったり、価値

を変えやすいものであったはずですが、ほとんどというより、全然と言ってもいい位しなくなってしまったのはどうしてでしょうか。

五才以前にこれらによって遊びに熱中した世界——子どもの遊びの世界は大人から見れば、空想の世界だったのでしよう。そんな子どもの世界でHは生きていたといえるのではないかと思います。それに対し、五才を過ぎからの遊びは、現実の世界に深く切りこんできたものようです。そしてH自身の自分の捉え方も変化していきます。

☆耳にティッシュペーパーをねじってはさみ、食器棚によじのぼって飛ぶ。思わず笑ってしまって、「そんなことして飛べるの？」とつい言ってしまう。すると、平然と「とべないのはわかってるけど、飛べるような感じになるんだ」と言う。

☆寝る時、その日一日あった事を喋ることがあるが、自分から「僕、いいことしたんだ」と言う。また、母に叱られたことを反省して、「僕、悪かったことが悪い」

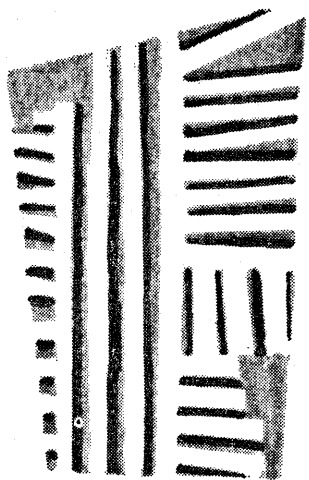
と言う。

このように、自分というものを客観化してみつめるようになってきているのです。

私のように仕事を持っていきますと、どうしても子どもとふれ合う時間は少なく、毎日の育児も、してやらなければならぬ世話が先に立ちます。そんな時、こうして夜、自分だけの時間をみつけ、子どもの生活を思い出して記してみると、母親として、ゆったりと子どもをみてやらなかったと、いつも省るのです。でも、子どもって本当におもしろいものです。私達もつい三十年程前にはそうであったのに忘れかけている、あの屈託のない笑い、あまりうまくできて叱れなかった悪戯。

そして、子どもの心も体と同様に、だんだんと育っていることに気がつき、感謝するのです。

それでは、子育て真最中の皆さん、お元気で。



時々ふと生活すべてを変えてしまいました
くなります。日常の生活から抜け出して
全く別の生活を送ってみたいと思うので
す。もし、あの時、これを選ばなければ
もし、あの時、あの一言をいわなければ
きつと、私の人生は、今とは全く違った
生活をしていたのではないか。そうとり
とめもない、そして、どうにもならない
ことに思いをはせてしまいます。

ごく平凡な日常に身をおく私でも、毎
日さまざまな選択に迫られます。今日は
何をしようかしら。何を食べようかし
ら。何を着ようかしら。ひとつひとつの
小さな、ほんのささいな選択が、ひとま
とまりとなつて、その人の生活に対する
姿勢やスタイルを形作っているのです。

「あ、すてきな人！」と思える人は、選
択が上手な人なんです。しあわせと思え
る人も、選択が上手な人でしょう。

さて、私は？と考えると、決して選
択は上手ではないようです。ただ、でき

るだけ楽しい選択、自分の気持ちがあ
っぴーになる選択をしてゆきたいと思いま
す。

小さな選択の積み重なる日常に、少々
あきてくると、私は、トランプでいえば
全とりかえみたいないな心境で、パーツと変
えてみたくなります。それで、ひとり者
の身軽な私は、引越しを計画します。

地図をひろげて、今度は、この地域に
しようとか。間取りは、こんなのがいい
とか。そして不動産屋めぐりが始まりま
す。作家の村松友視さんが、やはり引越
し好きで、移って、しばらくすると、ウ
ズズと引越しの虫がうずくそうです。
人間には、定住を望み、そこで生活を
着実に構築してゆこうとするタイプと、
いつまでもフラフラと、移り住むことを
楽しむタイプがいるのかもしれない。
私は、もちろん、フラフラのタイプで
す。秋の夜長に、とりとめもなく思うの
です。……。

幼児の教育 第八十四巻 第十一号

十一月号 ㊦

定価三五〇円

昭和六十年十月二十五日 印刷
昭和六十年十一月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 編行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレーベル館にお願いいたします

私立幼稚園の昭和史

こぼればなし

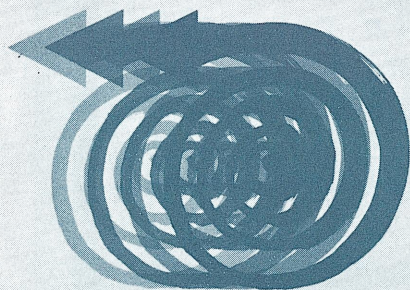
青柳義智代・著

私立幼稚園の歴史を語り、隠れた
エピソードをも今ここに明かす！

私立幼稚園の昭和史

こぼればなし

青柳義智代 著



私立幼稚園の発展のために生涯をつらぬいてきた著者は、即日本の私立幼稚園の歴史であることは万人の認めるところです。本書は、その歴史を振り返るとともに、表面化しなかったさまざまなエピソードをまじえて事実を綴っています。私立幼稚園の発展を理解する上で重要な書です。

B5判・128頁・定価 1,300 円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キッズブックの

フレーベル館

障害児保育実践シリーズ

〈全6巻〉

大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗 編著
A5判・セットケース入り・各巻平均264頁・セット定価10,800円

- 第1巻 / 自閉的な子どもと保育
- 第2巻 / 発達に遅れのある子どもと保育
- 第3巻 / ことば・聞こえ・見ることの障害と保育
- 第4巻 / 病虚弱・肢体不自由の子どもと保育
- 第5巻 / 心に問題をもつ子どもと保育
- 第6巻 / 障害児保育の基礎

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか？

- ♣いま、保育現場では、望ましい障害児保育について真剣に模索されています。
- ♣症状も程度も多岐にわたる障害児の姿を十分把握し、一人ひとりの個性を見きわめて保育することが大切です。
- ♣このシリーズでは、実際例をたくさん出しあつて、なにをどのように指導したらよいか、具体的に考えていきます。
- ♣また、実践者との座談会を随所にとり入れ、現場のナマの声を通して保育者にとって必要な問題点を探っていきます。
- ♣たんなる理論書や研究書ではなく、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。
- ♣豊富な事例、適切な助言、イラストも多く読みやすいこのシリーズは、きっとお役に立ちます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館